

推定・永代美知代作「老嬢の告白」目次
（『中央新聞』明治42年6月13日～8月11日、全43回）
付・「老嬢の告白」に現はれたる教訓（一記者）ほか

- (1) 6月13日 世に所謂「老嬢」
- (2) 6月15日 「お前は不容姿だ」
- (3) 6月16日 男のやうな風俗
- (4) 6月18日 好む学問の道
- (5) 6月19日 叩けば開く胸の扉
- (6) 6月20日 女学校を卒業
- (7) 6月22日 感情の満足
- (8) 6月23日 相愛の情を了解
- (9) 6月25日 未亡人は鼻の眼
- (10) 6月26日 咲かぬ間の夜嵐
- (11) 6月27日 西洋人の手紙
- (12) 6月29日 待ち抜た三日目
- (13) 6月30日 古来征戦幾人還
- (14) 7月1日 脆も羽の破れた蝶
- (15) 7月2日 既に犠牲の生涯
- (16) 7月4日 私の性格の変化
- (17) 7月6日 情の満足
- (18) 7月8日 私の「デヤレスト」
- (19) 7月9日 出来る結婚も為ず
- (20) 7月10日 三条通の旅館
- (21) 7月11日 死のやうな沈黙
- (22) 7月13日 弱かりし過去
- (23) 7月14日 恋人への忠告
- (24) 7月15日 柊の森の夕湿り
- (25) 7月16日 悲劇を作る性格
- (26) 7月17日 故郷の嬉しさ
- (27) 7月20日 面白からぬ故郷
- (28) 7月21日 新しい誘惑とは？
- (29) 7月22日 また不思議な事
- (30) 7月23日 僕は養子の身

- (31) 7月25日 私の感じた不安
- (32) 7月27日 徳操の危機
- (33) 7月28日 須磨の二の谷
- (34) 7月29日 彼の態度が急変
- (35) 7月30日 生涯一度の立腹
- (36) 7月31日 一步の先は闇暗
- (37) 8月3日 皮肉なる運命
- (38) 8月4日 我儘な弟嫁
- (39) 8月5日 私の放浪時代
- (40) 8月6日 更年期前後の私
- (41) 8月7日 感情の権化
- (42) 8月10日 最後の危機
- (43) 8月11日 四十年間の試練

— — — — —

[A-1] 「老嬢の告白」に現はれたる教訓
(一記者) 明治42年8月12日

[A-2] 「老嬢の告白」に現はれたる教訓
(一記者) 明治42年8月13日

[A-3] 「老嬢の告白」に現はれたる教訓
(一記者) 明治42年8月14日

— — — —

[B-1] 「意味深き暗示 「老嬢の告白」を
読みて」(某文学博士談)
明治42年7月7日

[B-2] 「老嬢の告白」を愛読す(無署名)
明治42年8月12日

心を傷ましむる

●老嬢の告白(つづ)

▲「お前は不容姿だ」と云ふ一言は、私が物心つきますと同時に常に家族から浴せ掛けられる言葉で御座いました。村のお祭りにも、親戚の祝賀会にも、姉や妹を美々しく着飾らせて連れて来る。私の両親は、其の中へ私を交へるのを喜ばせませんでした。着飾れば着飾るだけ、妙や妹に容色劣する私を、出来るなら尼寺へでも與つて了度

いと思ふやうな氣色が、どうするに両親の態度に詳はれるので御座いました。血を分けた両親から疎まれるやうな顔に、何故私は生れついたのだらうかと、私は幼な心にも然うした事を考へないでは居られませんでした。事實世の中に女ほど

自分の姿色を氣にする者は

ありません、如何に子供とは云へ、人並の心を持つた私は「汝の様な不容姿者は大きくなつてもお嫁に貰ひ人がない」と云はれる度びに、竹船で切られるやうな苦しさを感ずすには居られませんでした。聽てその苦しさが堪へる。

▲衣服も白粉も不要 花飾も人形も要らぬ心持にならして、たゞ一人部屋の中に隠れて泣き暮すか、ブランドとして野山を逍遙ひますか、何れにしても成るべく人様の目に懸からぬやう、顔を見られぬやうに自分から氣を注ぎ初めました。幸に自分の不運を悲しむ計りで人様を恨む心持にはなれませんでした。御座いましたが、若し一足を踏まれば、此の上に取り回しのかね偏屈者になつたらうと未だに其の時分の事を考へて慄慄するので御座います。併し人様を恨まねとは云へ、然した不運の日の下に生

れた子供心は、幾らか曲げないで居やう筈がありません。六ヶ敷く云へば厭世とでも申しませうか兎角に世の中の賑やかさが嫌ひで、自分は今もう一生田舎に隠れて暮さうとか、どんな事があつてもお嫁には行くまいとか、随分大人染みた考へを、微然と頭腦に持つて居たので御座いました。今から思へば其の時分の考へが、私の

▲獨身生活の土臺を固めたやう

で御座います。「三ツ兒の癡百までも」とは全然馬鹿にされぬ譯では御座いませんが、抑て私は小学校へ入りました。小さくやつて毎日泣きながら通學致しました。學校では遊ばず居るか、たゞ一人自分から除者になつて勉強し、時間が済むと走るやうにして宅へ歸り、一則に籠つて勉強したもので御座います。其のお蔭ですか、學費の方は何時も成績が優れて居まして時には百點のものを百三十點も頂いたことが有りました。

子供の美貌を喜

ぶ。私の両親は子供の學業の上で來を喜ばねば筈がありません。私が學校へ上つてからは両親も前ほどに懐なく當らな。此の娘は何時も一番で御座います」と人様に私の事を吹聴するやうになりました。私は別に両親を恨む者ではありませんが、僅ういふ風に子供を扱かう方が若し世間にお有るならば、私は泣いて其の不心得を御告げねばなりません。(つづ)

私の両親は子供の學業の上

で來を喜ばねば筈がありません。私が學校へ上つてからは両親も前ほどに懐なく當らな。此の娘は何時も一番で御座います」と人様に私の事を吹聴するやうになりました。私は別に両親を恨む者ではありませんが、僅ういふ風に子供を扱かう方が若し世間にお有るならば、私は泣いて其の不心得を御告げねばなりません。(つづ)

心を傷ましむる

●老嬢の告白(つづ)

▲男のやうな風俗をして斯く一生懸命に勉強して居ります間、歳月は流れるやうに過ぎ、十五の春には滞りなく尋常小學校八年の課程を卒業致しました。歸へ立てれば此の八年間には父の病死、姉の結婚など、お路の種々多きは御在りませんが、要するに私の周囲に生じた事件は皆な私の心持を暗い淋しい方へ誘ふ事ばかりであつたとお察

し下さいまし。ですから小學を出る前後にもなれば、世間の娘達達は赤の半襟、色の帯、袴の好みは云ふ迄もありません。下駄や雪駄の緒にまでも贅をおましなさるのが習慣ですが、私だけは其の仲間を外れて、髪飾もせめて化粧もせず、ワンピースの衣服を着て書物と腕めく比を爲て居たのでございまして。併し父と死に別れ、姉を嫁づけましてからは、母の興味が多分私に注がれるやうになつて、何かの時には「白粉を塗れ」とか「紅梅の帯をべめろ」とか申し初め、自分から梅を採つて私の髪を上げて呉れたるもありました。

▲私とても娘氣 是有つたので御在ますから、それを隠したいと思はないのではありません、殊に身体は人傑並に好く發育致しまして、小學を出た時には最う好い加減の娘になつて居たのですから出来なればお友達やうに赤い服を着て見たいと思ふのでした、けれ共申し上げました通り「汝は不器用だ」と云はれ續けた言葉が餘りに深く私の心に刺まれて居て「私は醜態だ」といふ觀念が何事をも爲るに先立ち立ち引込み思案と陰鬱とが直ぐ伴つて來るので御在りました。尤も私が十五六になりましてからは、よく母が「汝も大分容色が直つた」と云ひ、致しましたが、私にはなうも夫が信用出来ません、何だか母が私を慰める爲め心にもない事を云ふのではないかと、つひ憂心を起します、那麼風ですもの、稀に娘らしい風俗を爲せられまして。

▲お化粧の後で鏡 を見るのが世にも辛い苦しいと思はれ、よく促がされてからでなくては決して鏡を見ないに致して居りました。本當に私は暗衣を着た時ほど肩身を狭く、何とも形容の出来ぬうら悲しさ、物淋しさを感じたは有りませんでした。その心持を母は母も了解して呉れましたものか、一日私を膝許に招びまして「汝は餘り氣が少さ過ぎる、それは私達の教育の方法も悪かつたのだらうが、一つはお前の心次第にある。兎に角汝は不幸福な娘だ。私は將來汝の好きな通りに爲せて上げるから、よく考へて自分の爲たいを云ひ、女學校へ上り度ければ上げもしやう」と云ふた物語で御在りました。私は此の時ほど母を偉く、感しく難有く思つたはありませんでした、仍て私は母の許可を得て廣島の女學校へ参ると決つたので御在りますが生中女學校などへ行かず、矢張り一人で田舎に居た

とすれば、もつと純粹の女の一生活を送るゝが出来たで御在ませうに、些し學問が出来たといふとも、實は私の生涯を暗くする一つの悪い芽なので御在りました。(つづ)



○老嬢の告白(つづ)

▲好む學問の道を探ねて廣島へ出ました私は同市の某私立女學校へ入學致しました、此女學校は宗教學校で西洋人が管轄致して居りました、私は最初寄宿舎へ入りましたが、初めて入學した日は皆様の眼が私の顔にばかり集まつて居るやうに思はれ、然うでないことにお笑ひなさる聲までが聴度私の顔を笑つて被在るだらうと、細く小さくなつたのですが、夫れにも増して辛かつたのは校長の西洋婦人が私を除外に致すまでした、一体西洋人は生徒の顔さへ美しくしければ學問などには構はず、極めて偏つた愛情を示す者の従つて私などは始終横目で睨れて居たので御在ます。殊に西洋人の老嬢となれば堪まつたものでありません、併し老嬢が若い女生徒を痛めつけるお話は私の實験を有りの儘に、後程お話を致しませう。それよりも既に申上げました通り、私の性質は淋しい方です、淋しい住は得て



工學士春日市氏(三
十歳)に去る四十年工
科大學を卒業現に農
商部省長御たり本日
星ヶ岡温泉にて東渡
の途に於て
長川合
成合體子(二十
四歳)の門女學館出身
の事蹟の奥を綴ぐ

▲宗教上の慰安を求め度があるもので御在ます。十八の春、私は遂に神の教へに従つて洗禮を受けました。本當の慰安が宗教から得られるかどうかは、今の私には疑問なのですけれ共、渺くとも

其の當時は苦い涙を拭つて下さる空想の神様が難有かつたに違ひありません、白狀致しますと、厭蘇になつてからは、前ほどに顔の不色とも氣にならず、厭世思想も幾らも取り去られて何事も皆神様の御運と、忍ぶことが出来る様、になりました。併し例の仙人氣は失す、よしや天地の覆るゝが有るとして、一生を「悲き處女」として暮す決心は論るまいと思ひ定めて居りました。その堅固な私の心が、不思議にも、意志を以て抑へるゝの出来の變動を受け、月に向つて開く花のやうに、次第に柔らいで來れとをお話すれば、應々皆陰はお驚きで御在ませう。だが皆様、

▲私にも初戀は有つたので御在ます、あゝ不思議な、思つても考へても解くゝの出来ぬ自然の力は、私の知らぬ間に私を生み、私を育て、私の胸に燃える材料を預け、それに火を點じ、火力が熾になつてから、初めて「お前の胸の火！」と私を喚び覺ましたのでした。皆様、何、知らぬ少女の胸に初めて人の倂が差した時は、學者が大發明をした刹那と同じ驚き、同じ喜び、同じ疑ひを感じるので御在ます。私の心の部屋に、初めて入つた人は私と同じ教會に屬する青年の一人なので、ある、私も到頭女の味ふべき第一の甘い、併しながら苦い盃に魅せられたので御在ました (つづ)

説はめて聞かすい 妙一 悲しうしむつて



○老嬢の告白(つづ)

▲叩けば開く胸の扉
のは、見るからに厳格とした、頼母しさうな、信卿も辯舌も人に譲らぬ青年でした。二十五六の平生は極めて無口な人で、別に私とも話を致しません、たと同じ教會で時々顔を合はせる位なものでしたが、或る時、その日は急に雨が降り出しました、教會からの歸りに、私は折悪しく傘を持たないで歩いて居りますと、私の名を呼ぶ人があります、振顧つて見るとそれが其の人なのです「お困りでせう、僕の宅は直ぐ其處ですから傘を持つてらっしゃい」といふ親切でした。其時に私の頬を染めて流れた血潮こそ神ぞ知ろしめせ、私が初戀のそれなので御座ました。否え、私は嗜き好んで恣意とお話致したくはありません、たゞ

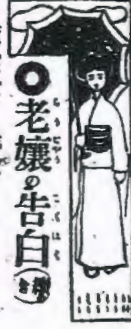
▲悲しかつた想出
の眞面目な事實としてお話しするので御座います。悲しい想ひ出とは何？皆様はもうお察し下さるでせう。私のその初戀は浮雲に書を描いたのと同じ、**亂て散**つて、**直ぐ消えて了つた**のです。

餘りに儚ないお話ですが、初戀とは大抵恋うしたもの、男の心を知るとも出来ず自分の胸を打ち明けるとも出来ず、恥かしさと恐しさとに悶えて居る中、その人が急に遠方へ立つて了ふ様な事になり易いものです。そして私の場合にも、事實は全くその通りで御座りました。私は美しい初戀の夢を見るまでもなく、**冷**かな

風に眼を覺まされた**薄倖女**もう／＼忘れても男の事などは思ふものでないで決心致しましたのは、一方から云へば、私の苦痛が凄くなかつた證據にもなるで御座ませうか。それは兎に角、其の後の私は再び枯木寒巖に據つて

▲三冬更に暖氣なし
と申しませうか、自身の身内に血があるか肉があるか、それさへ解らぬやうな、女の馬車馬か、聖教の尼僧かのやうな心持になつて一心不亂に勉強致しました、殊に讀書に耽りましたと、よくもあんなに讀んだと思ふ程で御座います。けれ共此處で申上げ度いのは、其の頃の私の心持が、初戀を意識した昔に比べて、決して同じではなかつたのです。一度火に焼かれれば焼かれるだけ、鐵は鍛はれて堅くなりやす

一度染めた紅筆は洗つても眞白くなるものでありません。私の心も一度使つた紅筆、火を潜つた鐵と同じく女らしからぬ心持とはいへ「女」を意識してからの心持は、昔から見て餘かに複雑にもなり不純にもなつたので御座います。



老嬢の告白

▲女學校を卒業 致しましたのは丁度廿二の歳で御在ましたが、私は尚ほ學業を續けて同じ女學校の専修科に留み止まりました。唯今から考へると其の頃は日本の女學が大分盛になつて居たのでして、東京では男女交際會や、あの有名な鹿鳴館の舞會や、色んな上つ皮

の文明が傳へられ、洋服を着る女、帽子を冠る女、それ

れはもう、随分可笑しな時代でした。で御在ます。若し東京の女學校に居て、専修科に止まつたならば別に變なともありません。有難に廣島のやうな邊僻の地に在る女學校では、皆大抵、五ヶ年の普通科修業を待ち兼ねて直結婚を爲さ

いました。つまり専修科などに在るのは一生を傳道事業に捧げやうとか、學問で身を立てやうとか、何れにしても異つた志の人ばかりで、それが又、よく願いて見ると十中の七人は

▲失戀とか不遇 とか必らず奇の運命を抱いた方で、一口に云へばよく

の賣れ残り、人數も尠

美人も尠なく、何處かにかう、

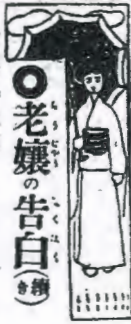
肌合の異つた女ばかりでした。私も其のお仲間入りをしたので御在ますが、専修科になつてからは、普通科生と比べて多少の自由も利き、生徒としての奮闘でも

あり、何故につけて我儘も通るやうになつてしまつた。併し春から秋にかけて、つい此間迄は同じ教室に机を並べて居たお友達が、離れ彼れとなく結婚を爲さる、その通知書を取ら度、私は云ひやうのない淋しさ、腹立たしさを感ぜないでは居られません。嫁姑ですとも、嫁姑に相違ないのですが、其の時は嫁姑だも自分で思へませんでした。否、さう思ふのが嫌だつたので御在ます。ですから、其の心持を藏す爲めに、出来るだけ私は輕躁でも見ました、禪學の本を讀んでも見ました、節曲の御稽古も致しました。けれ共結局は

▲あゝ私は孤獨だ、何時まで経つても一孤獨ぼつちだといふを深く感じるんで御在ました。すると急に年が老つて了つて、元氣も面白味もないやうな氣になり、夜など御部屋で讀書して居りまして、寧ろ此世が味氣ないと思はれました。愚癡に、若し「あの人」でも来て下されば、その胸に手を附けて泣いても見度いと身悶いたしました。お笑ひ下さつては困りますが、其の頃ほど、私は「あの人」の事を激しく思ひ出したのは御在ませんでした。其の爲めに折角冷たくなつて居た心が、どれほど温められ、抱えられてましたか。恐らく皆様の御想像も及びは致しますまい。處がふとした舞會から、私の心

急に又若くなりまして、感情の満足と興へられるやうになつたので御在

ます(どつく)



老嬢の告白

▲感情の満足とは他でもありません、畢竟第二の戀が出来たので御座います併し第二の戀では申しましたが、以前のは極々塵ろばな片戀、然して今度のは相戀、ある意味ではこれ**が本當**

の**初戀**かも知れませんが、どちらにしても今の若い方々が一度出會つて直ぐ戀になり、それを平氣で何度でもお繰り回しになるのとは、大分異つて私ののは極

時代的の、犠牲もあり涙も

ある戀でした。私の生りは私が二十二歳の秋、ある日曜日の、私達五六人に

合盤に付き添つて市外れの某花園へ萩の花を見に参つたことがあります。心ゆく秋の眺め、萩の下露に足を濡らして歩いて参る後から、若い男の聲で合盤を呼び留めたのが聞えました。合盤は一目振顧ると「まあお前!何時お出でだつたのだい?」と心から驚いたのでした。『唯今』と

▲青年は莞爾に會釋して「學校へ行つたら萩を見に行かれたと云ふから追まけて來ました」それはまあ」といつた風で暫くお話を交されてから「これは遠方から來た私の甥です」と合盤からの紹介に皆な會釋を致しましたが、私は如うでせう!お辭留も忘れて、時處も忘れて其の青年に見入つて居たのでした。ハツと氣が注いで、

眞根になつて御挨拶は致しましたが、もう其刹那から私の心は狂つて了つたので御座いました。不思議と申しませうか、其青年は年こそ二十三四を超すまいが、聲といひ調子と云ひ、中にも顔や肩つきの風が、恰で兄弟ではないかと思ふ程私の「あの入」……絶入やうに想つてゐたあの人も瓜二つなんで御座いますもの。其日それから怎うして寄宿舎に歸つたか、私はお話をする今でさへ、尙ほ夢現のやうに何事も覺えては居りません、ただ嬉しさと恥かしさと、餘りの不思議さに嘆息さへ忍んで居ましたが、舍へ歸ると直ぐ自分の部屋へ駆けこんで、

▲大聲を上げて泣いたとだけが今更のやうに思ひ浮べられます、併し合盤の甥といふ青年の御は忘れず、其夜を夢に描いて寢ましたが、翌日からその青年が毎日のやうに合盤を訪問致しますたび、私の念は次第に激しく強くなりまして、神學も讀書も棄て、置いて、其人の來る時間を怎麼に待ち説びたでせう!其頃學費の都合で合盤の書記を致して居りました私は寄宿舎の方へ足音が近寄る度に、心を跳らし、耳を傾けて

幾日も經の中に到達其の青年の足音を聞き分るやうになりました。叔母は在ますか」と問はれては「はい」と云ふ時の嬉し誠に他愛もないに心を使ひ居りました、其中その青年が神戸の某學院の出身者だと知り、多分來春から私共の女學校の教師になるだらうといふ事、それ迄を廣島に在て教會を助けるといふ事などを密に仕て、一つ／＼を自分の事のやうに喜んで居りました、私はもう自分の不器用な色などを顧みる暇もなく、たゞ全心を傾けて、其青年と顔を見合せ、下らぬ短かい挨拶を交はす時間待ち焦れて許り居たので御座います。(つづく)

●老嬢の告白(きん)

した。愛は死んだ女をも甦らせ
ます。殊に自分の醜いを知つて居る女
が、人から愛された時の心持……「醜女
の深情」といふ語を私は最も鋭敏に思
ひ當つた者でした。況て人に愛れた青年
から愛を示されたのですもの、私は悉く
感激しないでは居られませんでした。

▲瑞々しい處女心 は喜こびに充
たされました。全く其の頃ほど私の親が
幸福の光に輝いたとは有りません。けれ
共二人とも熱心な基督教徒で御いました
から、各自に守るべき所は守り、抑えべ
き所は抑えて、徒らに意固心猿を趁ふて
走るやうな行ひは致しません。たゞ日

毎に見交す眸の中に、竊かに交す手紙の中に、燃る心を語り合ふのが常のことでした。併

し其の邊の消息は之れ位にして暫らく皆様の御推察にお任せ致しませう。たゞ此所では非共申上げて置かねばなりませんのは、其の多を越したばかりの正月にふとした失竊から火を出しました。

▲寄宿舎が火燒の災難に遭つたので御在ました。従つて寄宿生は急に夫れぐの家へ預けられたのですが、私

▲一層堅固な籠に入られたやうで御在ました。譬へば外出を致しますにも、一々下女を附けるとか、でなければ後から私の行先を調べて固るとか、随分變に氣を回した方でした。會々國から若い男が訪ねて参りましても自分が立會つた上でなければ會はず、手紙が参りましても有緊に自分で開封は爲ないまでも、誰から何を云つて來たかぞ、妙

に立ち入つたときまでお訊きになる
其時代、私が柔順であつたから好しかつ
たやうなものと、今の私なら其の失禮を
責めてやると思ふほどの事が毎日でした
此頃喧ましい「女十五ヶ條」より、もつと
「醜い御妻様」といへば、大抵どんな種
類の未亡人かとお解りになりませう。所
が困つたときには、その未亡人がどうやら
私共の懇を約付いたらしい一件が持ち
上つたので御在ました(ひとく)

本のお葬の生えが御名に付たる月圓人
がぢれつなくて堪まりません、一体何たいていを
爲てゐんでせう(芝たつ子)

水 人 家 の 別 事 様



老嬢の告白

▲未亡人は鼻の眼を持つて居りました。明るい中の事は見えないうちに暗はらず、暗の中のと云へば土屋の戀も見透すといつた人でした。で御在ますから、忍ぶれど色に出たる戀包

ひに餘私共の戀が目に着かな

いで居る筈はありません。先づ第一に、從來意中の青年が學校へ舍監を訪ねる度に交換した手紙が郵便で参ります。それへ未亡人が眼を注きました。これは○様からぢやありませんか。よく来るやうだが同じ町に居て何が用なのですか。と皮肉な問を返すはまたしもの事、折返し目に變になつて私の机の上に置かれたあつたり、大事に藏つて置いた文反古がかき亂されて有つたり、實際堪えられないやうな事はかりでした。遂には私に對つて若い男女の交際は危険だから、あの人(私の青年を指名して)とは話を云はない様になさい。手紙は勿論可けません。▲露骨極まる忠告でした。併し熱し切つた二人は、然うした忠告に耳を

傾むけるだけの心になれません。矢張り教會の集會や、學校からの歸り途に、淋しい街で顔を合はせ、果敢ない言葉を語つて居りました。けれ共、戀は

熱する處まで熱しなければ醒

るものでありません。さうして私共の熱

は次第に高まる一方でした。心と心が

相食んで、何ほ飽かぬやうな思ひでした。

私共は四五ヶ月の後は、来るべき其

日を持ち兼ねてさういふ前に結婚指輪

を取り交せたので御在ました。勿論、そ

れは誤まつてゐたに相違ありません。け

れ共、愛の前には日月も光を

暗くするぞ云ふや御在ませんか、善

惡の標準を以てお律しになつては困るの

で御在ますよ、所が例の未亡人です、

忠告の効果が無いと解つたので

▲最後には疳癪を生しまして、

「私の忠告が聞けなければお氣の毒だが

お世話は出来ません、それ許りでない私

は公然貴女の行爲を發表する」と、侮辱

にも程のある人困らせを初めたのです。

今の私ならば、「あら然うですか位で

ん、そんな家を出て了つたのでせうが

其の頃は始終胸の痛さに悩む

處女氣でした。口惜しいとは思ふ

のでしたが、辯解も出来ず反尤も出来ず

泣いて黙つて、謫憤を孕はせられまじ

一体タスチヤンに怨うした未亡人の多

いとは、傳道士にも餘程の損害だらうと

思ひます。だから私はタスチヤンの未

亡人が七里骨灰なんぞ御在ますよ。併し

まア夫は夫に致しまして、困つたとは今

度は私共二人の間に急に涌き上つて参

りました。

始を我基を因る類たも

▲咲かぬ間の夜嵐 急に話し度
い事が出来たから會ひ度いといふ手紙が
一日私の意中の人から参りました。都合
をつけて出會つたので御在ましたが、話
を聞いて見て驚きました、と云ふのは怎



○老嬢の告白(續)

中になつてその手紙を讀んで見ました。

舌を喰切つて死んでも飽足
ない氣持で、苦痛を忍んで
其夜を二階で泣き明かしました。無理に
反らつて出れば出たのでせうけれど、
私はさうも出来ませんでした。口惜しい
悲しいで其夜を明かし、翌日の朝早く彼
を訪ねましたが、彼は私を迎へるなり手
を振つて、運命が迫りましたよ!と泣
く様な聲なので御在ます。そして私の前
に、西洋人からの手紙を投げ出し、ま
ア御覽なさい!と云はれる儘、私も歩

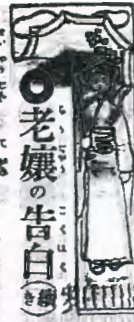
▲是非に今晚出會ひ度いとの
事でした。私はもう焦々致しまして、直
ぐにも飛んで行き度いと思ふのでありま
したが、何うでせう、例の邪魔者が入り
ました。夕方になつて出て行かうとする
時、未亡人が私を呼び止めて「夜分の外
出はお読みなさい」と彼仰るぢやありま
せんか。あゝ此の引裂けやうな胸の中が
見えないのか!と私は地圖太を踏んで、

念悲哀の涙に驅られるので御在
ました。で其の日は、行くにしてもまだ
時日も有るとだし、不取敢西洋人へは行
くと申し送つて置いて、愈々の日取まで
に出来るならば結婚もして置き度いと云
ふやうな、大まかな下相談だけで立別れ
ました。歳が四五日経つてまた一青年
から手紙が参り、事件の思つたより急に
なつたから、

動いて、取留めもない不安の
念悲哀の涙に驅られるので御在
ました。で其の日は、行くにしてもまだ
時日も有るとだし、不取敢西洋人へは行
くと申し送つて置いて、愈々の日取まで
に出来るならば結婚もして置き度いと云
ふやうな、大まかな下相談だけで立別れ
ました。歳が四五日経つてまた一青年
から手紙が参り、事件の思つたより急に
なつたから、

▲學業と情愛の満足 と其の邪
れを探るかといふことになるので御在ま
す。私、私も胸を抑えて色々考へて
見ました。意中の人を遠く海外に送るの
は、素より情として満足の出来ない事
で、すれ共、深く考へて見れば、一時の女
らしい感情に支配されて百年の悔を發す
よりは、暫くの苦痛を忍んで、日の大成
を期した方が遙かに可い、と、さう私の意
志が決定する下から、感情の波が

昔の僕一人で無い。貴女
といふ人が出来た今日は、自
分一人で自由の行動をとる事が出来ぬ。
此の場合の所決は是非とも貴女とも相談
の上にし度いと思ふが、怎うすれば可い
だらう?との事でした。此の相談は結局
を期した方が遙かに可い、と、さう私の意
志が決定する下から、感情の波が



老嬢の告白

△西洋人の手紙 には、慇懃に出
立は来月五日と定む、今月中に準備を
へて神戸に來れ」と人の心を知らぬ
かなべんの運び、今月中と云つても
僅か一週間なのですから、私は急に
放されたやうな氣になつて、黙つて泣
いて了ひました。私の泣いて居る間、彼
方は腹は拱いて何か尋ねて居ました
が、所突に事を止しませうか」と云ひ出
したので、「米國へ行くのも嬉しいが、
さう貴女を苦しめて迄も洋行する必要は
ない。僕は勉強も事業も悉く
我等の戀の爲めに犠牲にし

て可い」とさと思ひ込んだ顔子を見ると
私は何と云つて好いか、感情が極度まで
激昂して了ひました。果ては彼の膝に身
を投げて「行つて、行つて」と狂氣の
やうに繰り返す許りでした。男の心はよく
解つて居ます、此の不容色な私の爲め

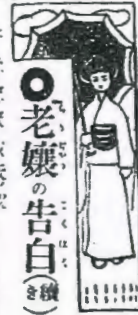
▲一生を犠牲 ににして呉れやうと
云ふ、其の志が通しくなくて怎うしませ
う。私の勝手を云へば、それは行つて貰
はない方が好いに決つて居ます。僅か一
日相見ずに居ても、千里隔秋の心に堪へ
られず、會は會ふにつけ、會ねば會ねに
つて、疲れるほどに胸を隔らせて許り
居ましたものが離れて遠く隔たるといふ

と、私には那麼事を考へて見るだけの勇
氣も御在ませんでした。けれ共父、私は
自分の情の爲めに、男の前途を害し、事
によつてはそれを致して了ふかも知れぬ
だけの決心を爲る勇氣も御在ませんでし
た。況して男が自分から自分を犠牲にし

るを云ひ出したものを、怎うして甘受
出ませう。男が五分の犠牲
を拂ふならば女は十分の犧
牲を拂ふべきものと教育されて居ま
した私は、殊に此の場合、誓へ死なばど
の苦しさを感じても、自分を犠牲にする
のが當り前だと信じました。それも之れ
で別れて了ふといふのでなく暫くの時を
待てば、吃度

▲將來は戀の凱歌 が歌へると判
明て居るのです。然う思ふと、將來の光
榮が目の前に浮んで、自然と涙も納まり
ました。私が元氣を取り直して、その心
持を彼に話しますと、彼も倏ち勇氣を
感したので御在ませう。貴女が其の覺悟
でさへ居て下されば、僕は本當に幸福に
貴女の愛に勵まされて一生
懸命に勉強する事が出来やう。

永いと云つても五六十年は夢のやうに経つ
それにお互にまだ若い、何うか愛と信仰
と誠實とを守つて將來の幸福を得て下
さい」と心の底から嬉しさうな聲でした
而して「神戸へ行く迄には一週間しか
ないから準備は出来るだけ早くせねばなら
ぬ。就ては今日の午後から貨品を發つて
備後の山奥にある親戚へ駈乞に行かねば
ならぬ。三日目には多分歸つて來て、今
一度悠くりお話をして置き度い」と云ふ
のでしたが、有緊に其の時だけは、話し
ても、飽き足らぬ此の短かい時日の半
分を、たと駈乞の爲めに國へ歸らうとい
ふ男の心が、怎うしても解らず、餘りに
情なうはなからうかと、たゞ夫ばかりを
想んだので御在ました。(つとく)



○老嬢の告白(續)

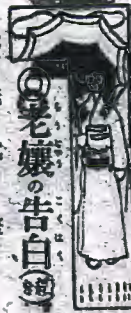
▲古來征戰幾人還 戀の戦場も恰度其の通りで御在ます。若し幾萬の戀人が、この戦場に宛れるとなく、皆なお互に手を執つて首尾よく凱歌を奏し得るならば、此世にキューピツ

トを恨む者は御在ますまい。さて私共が一度相別れての後は御推察にお任せ致しませう。無事に米國へ着いた、大學へ入學した、勉強して居るといふ様な報知が引續いて参りましたのは勿論、便船の度に細々と書き送る文の種が好うも續くと思はれる程で御在ました。私とても心持は同じ事、出来るならば日文も書き度いと思ふ程でした。併し別離の當座こそ然うで御在ましたが

▲追々分別の心 がつくに連れ、慙うした表面の静きを爲て居ては可くない。既に絶對の信用を仕合たからには、此處は一つ落着いて、出来るだけの勉強をして、彼の成功を待つの外はないと、我れながら賢くも決心を致しましたので、態度を改めて勉強に身を入れましたが、それと同時に、從來五度やつた手紙から三度、三度のものなら一度と、次第に往復の数も少なくなり、書きます文句も眞面目な分子が多くなりました。かう云ふ境遇になりますと、結婚は致して居りませんでも、もうお互に夫婦のやうな氣持になるものが見えます、彼からも手紙も次第に送々とした。老成ぶつた事を

書き送るので御在ました。然うして、淋しい中にも心樂しく、果敢ない中にも信ずる所、頼る所のある三ヶ年を送りましたが、私は次第に卒業の時期も近づき、何彼と心忙しくして居りました二月の某日、久しぶりに参りました彼の手紙で見ますと、まア怎うでせう!「申辭は立たぬが、

▲お互の婚約を破棄 して呉れ其代り自分も一生結婚しない、事情は云へぬが辨解もせぬ、應御立腹だらうが何事も無い昔の夢を歸らめて呉れ」と、今思ひ出します丈けでも腹の立つやうな事を聞かされた事情と云へば何事でも事情ぢや御在ませんか。その有りふれた口實に藏れて突然にかうした卑怯な事を云ひ出した男の心持が、怎うしても私には解りませんでした、私も其頃二十五歳と云へば女としては一通りの判斷も世智も出来た筈で御在ます。冷酷な手紙を読んで、悲みましたがの一時、私は直ぐ心を取直して男の方へその理由を訊ねてやりました、却つて五六通の書面を出しましたのに一通の返事も御在ません。私は其の當時の、胸を掻きむしられるやうな悲痛、悔恨死の迄忘れられませんが出来ませんでせう。私は弄られました、欺まれました、活々としてわた心を殺されました。あゝ一生に僅た一つの私の戀は、かうして遂に亡き敗れたつたので御在ました(つづく)



老嬢の告白

△脆く羽の破れた蝶は、もう飛で見る勇氣も御在りませんでした。暗きながら僅かに命を懸けて居るといふ有様。既に御座ります心に映ります。凡てが私を絶望の谷へ落さうとする。

悪魔の詭計。しかし見えません。谷の底に居て上を仰ぐと、一切のものが倒しまじしか見えないうもの。私は、もう其の絶望の谷底で時々唸り泣きました。一度もたつ所を何うして上れば可いか、それを考へる餘裕の有らう筈が、あんなにたゞ何時までも、寂然として、頭ひたさつた鼻を、舌もなく、口もな

打ち顔はせながら凝然として居りました。すると生れて物心つてから此方の事が、潮のやうに胸を衝いて湧き立ち回るのでした。悲しい事に出會つた後ほど、人の心が真面目になり威光が鋭く、如何な微かな事でも心の耳に聞て父の時は御在ります。私は死んだ父の聲を聞きました。母の聲を聞きました。父の聲を聞きました。母の聲を聞きました。

監聲、未亡人の聲、戀人の聲、友達の声、あんなに凡ゆる聲が、私の不幸を責めたり、悲しんだり、笑つたり、嘲つたりします。鮮かし夫れを聞いて居ると、私自身には別に悲しいとも口惜しいとも思ひませんでした。何か静かな心持になつて、他人の事を聞いてゐる様に、得らぬものはあつても、差迫つて飛立たねばならぬのやうには思はれませんでした。御在りました。本當に其頃ほど、色んな事を思ひ、考へたとは御在りません。恐らくこの時代が△私の一生の大轉機であつたのだらうと思はれます。その夢のやうな時代に學校を卒業して、久し振りで國へ歸りました私は、次第に年老つて行く母の姿を見るとき同時に、彌々春を葬つて、新しい夏を進まうと決心しない胸には、苦しみませんでした。

それに成人して行く弟や妹が、あつた。家は益々繁榮の極に達しやうとする。事實は氣が氣でもありません。つらく考へるに、どうも間違つて居た、姉が結婚した後は此の家の責任は云々とも私の肩に在る。その責任者が浮々として居て居られる時でない、殊に學校を卒業したからには、何か職業を發見して妹や弟の學費も拂ひ、母にも幾分の安心をおさせ申し度いと思ふに連れ、私は黙然として信る所が御在りました。それは私の生涯が犧牲の生涯であるといふ事を覺りましたので、會々不客色に生れて来たとも、失禮をしたとも、皆々此の運命の爲めであつた。と解りますと共に、私は最早女を廢める。私は然う心にも叫んだので御在ります。そして其の通り母に話しますと、母は老眼に涙を溜めながら、何も云はずに笑ひました。私も笑ひました。笑つて、それで初めて、生れたつたやうな、何でも次へ清々しい心持になることが出来たので御在りました。

監聲、未亡人の聲、戀人の聲、友達の声、あんなに凡ゆる聲が、私の不幸を責めたり、悲しんだり、笑つたり、嘲つたりします。鮮かし夫れを聞いて居ると、私自身には別に悲しいとも口惜しいとも思ひませんでした。何か静かな心持になつて、他人の事を聞いてゐる様に、得らぬものはあつても、差迫つて飛立たねばならぬのやうには思はれませんでした。御在りました。本當に其頃ほど、色んな事を思ひ、考へたとは御在りません。恐らくこの時代が△私の一生の大轉機であつたのだらうと思はれます。その夢のやうな時代に學校を卒業して、久し振りで國へ歸りました私は、次第に年老つて行く母の姿を見るとき同時に、彌々春を葬つて、新しい夏を進まうと決心しない胸には、苦しみませんでした。



◎老嬢の告白(續)

▲既に犠牲の生涯と観念し歸ら
めましたからには、よく云ふ雨降つて地
固まるの譬へ通り、私の心も確かりとし
て、それ迄にない興味を成じ、**八風**

吹けども動せず天邊の月と

生覺えた麻呂のやうに、其處までは悟
り切れぬくとも幾らか餘裕を持つ事が出
来るやうになりました、然うして居る中
に、差し當つて云ふでは有りませんが
家産も大分失くつた時分ではあり、何
か職業を求めて私の決心を實行しなけれ
ばなりませんので、母とも相談の上、弟
を廣島の中學に、妹を私の卒業した女
學校へ、何れも入學致させますと共に、
私は再び慈母の許を離れて、**今度**

は愈々浮波風の吹き荒む

實社會く立ち交はる爲め、仕事の

口を求めて廣島へ出ましたが、恰度京都
の某女學校に教師の口があつて其處へ林
任するに決めました、京都の女學校は
矢張り同じ宗教學校で、私は當分下級生

の英語と國語とを専ら持つ事になつたので
御在ました。

△生れて初めての**獨立**に就て
私の得ました感想も色々御在ますが、
概括して申せば武士が初めて**歐米**に赴つ
た時もあつて御在ませうか、昨日までは
唯だ練習したに過ぎなかつた事を今日は
實地に發表するので御在ますから、最初
は胸が動悸致しまして、その様子で云つ
たら、随分凄なものでした、けれども共私
は初めて諸壇に立ちました利那、何となく
雄々しい威儀に打たれ、いま自分が選
んだ職は果敢なく働きたい事であるが、自
分はこれによつて獨立し、弟妹を養ひ、
母を安心させる事が出来る、何うぞ他に
心を散らすや、一心不亂に働きたいと
然う思ふので御在しました。然う思つて事
に當れば、一つとして不愉快なものはなく
慣れれば慣れるもので、一年ばかりの間
に生徒との馴染も出来、自分から申すの
も可笑しう御在ますが、**彼女は若**
いけれ共確かりした好い教師
だと言うに、校長や理事も愛望されたの
でした。處がまア、私のやうな運命の者
には幸ひ初日は永く續きません。二十七
歳の秋頃から、毎月一度は身体の具合が
變になりまして、ブライ／＼して居りまし
たが、次第に重くなつて月に五日は床に
就き、それが七日間となり、十日間とな
り、翌年の春、木の芽が萌します頃には
到達しない**神經衰弱**の爲め、教職に堪へ
られず果ては

▲病床に埋まる身となつたので
御在います。然うして久し振りに淋しく
説しい日を送るのでした、何う云ふ御
ですか、熱のある時分には、米國にゐる
彼人の御が浮びまして、私の名を呼ん
だり、手を合せて泣いたり致します。そ
れが度重なるに連れて、不思議にも、あ
れ程鍛練された私の私が**別離前**
後のやうな感情的の焦燥
した、泣いて許り居る人間
變つて了ひました、あゝ、何日まで

経ては本當の堅固な心になれるのか、私
ももう自分の諸甲斐なきにホト／＼憂想
が盡き果てたので御在ましたが、仕方が
ありません。女の弱點を藏するも出来ず
に日を送りました。それで、三ヶ月程し
て床は離れましたが、それから云ふも
のは、絶えず發作的に**神經が働いて**、そ
の働いた時には立つても居ても、居られぬ
位に胸苦しく、その容体で考へて見るに
どうやら**正眞疑ひ無のヒス**
テリー患者はなり済まして居
たので御在ませう「あゝヒステリー」ヒ
ステリー」と私は然う打ち叫んで、一
人て部屋に泣き伏したのが、今から思へ
ば幾百度で御在ましたでせう?(つゞく)



老嬢の告白

▲私の性格の變化も餘程その間に目立つて變へられるやうでした。御存知の如く性が、次第に消え去りまして人様の前でも何でも、自分の思ふ事をすん／＼云つたり爲たりする。云はゞ女らしい處がなくなつて、男のやうな處が増えて來たので御在ませう。夫に意志、云へば立派さうに聞こえますが、實は片意地になつて、頑固になつて、人様が右と云へば私は左、と彼有れば私は右、斷分をあるのじやうに變つ

たので御在ました。多少はヒステリーの所爲も有つたに違ひありませんが、男性的になつたのも事實で御在ます。妙な事には、言葉使ひまでが變て參りました。親しい友達などに對しては、何時も男のやうな調子で話しかけるので御在ました一方、私の病氣は激烈な急性的な發作だけは、辛く療治が屆きましたけれ共、困つた事には、

▲急性よりも悪い慢性のヒステリーになり、それだけは今に至つて何うしても治りませんで御在ます。然うして三十歳近くまで獨身で暮して居ります間、怎うにか堪うにか、心中の苦痛を忍んで色に露はさぬだけの

鍛鍊を積むことが出來ました。けれ共感情が失くなつたのでは御在ません。寧ろ那方かと云へば昔よりも鋭敏になり、男女の間の秘密や、曲折した世事などは十二分に推察が出来るのでありましたが夫をたゞ知らない顔をして居るのでした露骨に申し上げるこゝをお笑ひなすつては困りますが、私は強い情の刺激、心だけで満足した若い頃の戀とは異

ふ、一種の苦しい衝動を感じたので御在ます。女一人の健康な身体に生れついてゐながら、不具者のやうな生活を送るには、無限の苦痛を感じないでは居られません。不自然な節制に節制それが餘りに重なります、身体の何處か狂つて、ヒステリーになつたり婦人病を生じたりするのは、世の中に深山その例が御在ます。そして遂には

▲變成男子的の女 になるので御在ます。そして私も、實にその一例に過ぎません。癡念では御在ますが、畢竟は生きたミイラなのです。此の血

と肉とは、人生に何の關係も有りません同じやうに御飯を頂だき、衣服を着ては居ますが、人間ではないのです。非情の草木と一つなのです。否、生中情を解する事が出来るだけに、一層の痛ましいものになるので御在ます。けれ共、兎に角生きてゐて、然う／＼絶対に情を抑へるその出來るものでは有りません、何處かに出口を求めて、通れやう／＼かうとするのが情の本質で御在ます。男に對する戀は、もう／＼死んでも仕ない／＼と縮らめた人でも、何か他の方面で情を満たさせないでは居られません。その結果は、お話しするのも氣が差しますが、私は全然告白して丁ひませう、遂に不自然な徑路を迷つて、同性の戀、女と女の戀といふものが出來るので御在ます。私はそれを大膽に僥倖して、出来るならば同じやうな迷ひに居られる多くの知人方を驚かし度いと思ひます。(つゞく)



情の満足

永年獨身で辛抱を仕通した老嬢の身になつては、今更ら結婚するの取かしく、されば云つて人から後ろ指を差されるやうな事は仕度くない、畢竟体面を破つてまでも情の満足を得やうとは思はれ併し何所かに逃げ場所を作へないでは苦し

話し致しました西洋婦人なども、一件百教師には獨身が多い爲めか、兎角に同性を愛人としたがります。

情の缺陷も補はれる、それでつい顔さへ美しくければ學業の如何によらず、依估難負な愛憎を示して女生徒を困らせるのですが、勿論色んな弊害が有りまして對者が自分の愛を受けない時、自分の愛を捨てた時、然うした時には随分如何はしい中傷を爲たり何かして、淺ましい女の情念を極めて露骨に發表するので御座います。殊に西洋の婦人が日本の

▲若い女生徒を誘惑する手段は實に巧妙なもので、之れと眼を附けたが最後、何うしても射落さねば置きません、最初は物を與ふとか嬌しがらるゝとかして、默心を買ひ、機會を俟

つて、突然接吻などを致します。一例をお話致しますと、私が廣島に居りました時分、同級の某といふ美人が、矢張り此の手段で婦人宣教師の寵愛を受けて居りましたが、普通部を出ると直ぐある會社員と結婚しました御主人は非常に立派な方で、十二分の愛情を新夫人の上に注がれたのですが、新婦人は何うしてもそれに満足し兼ね、矢張り昔のやうに宣教師と不自然な愛を續けられる、不思議に思つて訊いて見ますと、

「夫の愛も難有いが、自分は宣教師のキッスを忘れることが出来ない」その事でした私

は聞いた口が塞がりませんでした、萬事は然うした風で御在しまして、西洋婦人の熱烈な愛が、時には強制的に日本の若い女學生を痛め、遂には一生其の女を飼身で了らせ、よし結婚しても家庭を棄てていふやうな事は、凡そ宗教學校と云はす、官立女學校と云はす、寄宿舎のある所には必ず行はれて居るので御在します。そして此の惡風は日本婦人の間にも、殊に近頃は各學校の

▲寄宿舎の女生徒間に行はれて居ますので、それを學校によつて「イチ、ラウ」とも、「チャレスト」とも「ベツト」とも色々に申しますが、名こそ異なれ、恐るべき不自然を取つて、美しい感情を寛廢させて行くのは、思つて見るだけでも寒心に堪へません。けれ共こんな憤慨のいた事を申します私が、實は其の實行者の一人であつたとお聞きなさいますれば、應お驚ろきで御在ませう。併しそれもお話なければ、私の感情や心持の推移が御解りになりますまい。殊に秘密の多い女性の心持や生涯御解りになりますまいと存じます。(つづく)

相顔つといふ、些度御想像には上りますまいけれ共、随分と美文めいた仲になつたので御在ます。まるで姉妹のやうな關係で、私の肌膚の洗濯なども、人手に渡さず、悉く自身で爲て呉れるのです。けれ共、憐うしたとお話する私の心持は實に

▲苦々しい記憶に堪へず、良心の呵責に迫められないでは居れません。勿論お話する程ですから、唯今では純粹の清潔な生活を送つて居るので御在ます。其頃の事を思ひ出すと、いまだに精神の汚れが取り去られぬやうな氣持が致します。私は自分の惡かつたを告白する機會を利用して、今の獨身で

居られる女流教育家に眞面目に忠告致し度う御在ます

貴女方はみな立派な教育者で被在る、貞操を立て通して獨身の苦痛を忍んで被在る、けれ共、貴女方の中で、密かに御自身の良心に問ふて、何か疚しい記憶を抱いて被在る方はありませんか、女子の貞操は男子に對し又は單に肉體上の事のみではありませんまい、私が今日までに経験もし、見聞もした實例によつて、凡そ獨身で在られる、堅固な女子教育家達を、悉く信じるとは出来ないいで御在ます

男女の關係を喧ましく取締る丈けでは徳教の精神は決して満足されません。若し私の告白によつて、一人でも覺醒して下さる方があれば、それで私は満足致します。御免下さい、つひ露が岐路へ外れました。

▲寂寞たる生活に満足したかと申しますと決して然うではなかつたので、隣のヒステリーに悩まれ、心は益々頑くなつて了ひ、一晩泣き明かしに明かすとも度なでした。所が世の中は廣いもので、その狂氣のやうになつてゐる私

へ、二度ばかり結婚話が持ち上りました。一人は田舎の大百姓で母の方へ申し込み、一人は教師で校長から話を聞かされた思ひ召す。嫌なほど！第一には顔を見て決し、さうして最後は、馬鹿な！氣がつかないか好い笑はれものだ！と自分で自分を叱るのです。一つや二つ結婚が有つたからとて飛立つやうに結婚しては……といふ淺間しい女の虚

榮然とした眞面目な場合にまでも附纏つて、私は遠慮を拒絶しましたが、後で思へば愚の至り、何故、あの時に結婚して、幸福な生涯を得なかつたかと、正直に申上げるて後悔で抱りませんでした。(つづく)



●老嬢の告白(續)

▲私の「デヤレスト」の事を申しませう。この人も可哀想な人でして、若い頃の校通と大きくなつてからの校通とが恰度反對になつたのです。富豪の一人娘に生れて、美人ではある、實にはある、其の中にさる女學校を出てさる所へ嫁ぐ事になり、當人同士も喜んでゐましたのが、結婚間際になつて男が死んだのです。其の時に一生獨身と覺悟してからは、女學校の教師になつたのですが、私よりも四つ歳下で、それは女らしい、柔順な性質なので、恐らく誰からも憎まれた事は御在ますまい。それが何ういふ運命でしたか、男のやうな私と全然仲が好くなつて、同じく寂しい寄宿舎の窓に同じ月を眺め、露滋庭に同じ蟲の音を聞いて、歡びも悲しみも

へ京知うか人らで人、分し御夢へ云

▲出来る結婚も爲すに反抗的
に日を送る私は、表面は益々嚴かちした
喜怒哀樂の一つの試練に會つても、
微塵も顔色を動かさぬ、天晴れ堅固な女
流教育家となりましたが、内心の混亂紛
糾は怎麼で御在ましたでせう？其頃、學
校の音楽館にある地下室へ、胸
を抱いて泣きに這入る私の姿を
見た人は無かつたらうと思ひますが、若
しあつたと思へば、而して其の人が効か
に地下室を覗いて、私が全身を泣立てし



老嬢の告白(續)

をあげて泣いたり、又は愛心のやうに
なつて一つ處を眺めて居たりした處を窺
つたことが有るとすれば、其の人は私の心
中を洞察することが出来たで御在ませう。音
楽館の地下室は、全く私にとつて唯一の
秘れ家なので、私の「デヤレスト」とも
この秘れ家を知る人は出来ませんのでし
た。怎うした涙の幾度月！よくも悲みの
種が盡きなかつたものと思はれます。併
し時の経つのは早いもの、その中に弟は
中學を出て高等學校へ入り、妹は廣島の
女學校を卒業して私の學校へ轉じて参り
ました。

▲私も既う姥櫻 それに花も果も
ない枯木のやうな生涯、三十三の厄年を
迎へました時には、有流に涙々を感ぜ
るもあり、もう怎うせ果敢なくて通つて
来た人生の三分の二、あとの一分を又同
じやうな事に繰回してはならぬ。もうも
う何も彼も歸らめて了つたと、夫からは
多少遠つてゐた結婚の野心も、若い心も
悉く他人の事のやうに觀念し、出来るだ
け情を殺して、我れ我が心を

冷たく持つ修養を致しました。
と一口に云つて了へば何でもない様で御
在ますが、三十三と云へばまだ女の盛で
す、何處かに生温い血が流れてゐて、時
とするとそれが沸騰するともないでは有
りません。下世話に三十後家は立て難いと
申しますが、全たう女の此の時代に、我

れから死んで行かうとするのは、並一通
りの苦痛では御在ません。殊に世間の事
は、もう一切知り抜いた時代ですもの。
僕ら私が仙人だと云つても、多少の酸い
甘いは辨まへられ、昔の自分の戀なども
此頃の言葉で申せば、多少客觀が出来
るやうになつて居ましたかと存じます。そ
れは兎に角、何も彼も知り抜いたといふ
時代ほど恐しい時代は有りません。世間
の失錯は大抵此時代の人が爲るんで御在
ますね。だがその譯をお話する前に是非
一事件を申上げねばなりません。

▲一大椿事とは何？ 私に取つ
ては眞に一大椿事、それは十年無

音の戀人から手紙が参つた

事なのです。さぞお驚きでせう？全然
私も度々驚きました。何と思つて、何を
云つて？と顔へる手で封を切つたりには
「明日午後四時四十五分御地へ着くぞ、
五時頃三條通りの某旅館へ御來車後下度
是非々々待上候」とやうな意味だけが、
餘程周章でたらしい氣で書いてあるので
した。私は出来るだけ落着いてそれを讀
み回しました。讀み回して「今頃何を云
つてのだらう？」と呟やきましたが、
三分と経ぬ間に、私の心は平靜
を失つて了ひました。立つて居る事
も座つて居る事も出来ません。私は人に
藏れて、例の地下室の秘れ家へ、駆け足
でもつて泣きに入りました。(つづく)



老嬢の告白 (續)

▲三條通の旅館を訪ねて、翌日の午後五時過ぎに車を走らせました。私は、昨日後の手紙を受取つてから昨夜一晩、今朝から今へと雲を握むやうな事を考へに考へていた想ひです。萎然

と疲れ切つて、屹度蒼顔をしてゐる自分でも解るほど神祕だけが興奮して居ました。實は寧ろその事出會ふまいかとも考へたのでした。それも餘りに飽氣ないので、出て來は來ましたが、心中ではナニを云はれても此方に

此方から云つて、云ひ合つて了へば、此迄の事だとも考へられ、されば云つて、男が矢張り獨身でゐて、自分に結婚を迫るやうな事が有つたら何としやう? と云ふ事も案じられます。併し兎や角の間に名差の宿へ車着く、名刺を通じると向ふも恰度今着いた所らしく、直に私を部屋へ通しました。階手を上つて、彼の座敷へ近づき、機織しにその聲を聞き

▲十年以前の少女の血が一時に私の全身に湧立つて、靜かに、併し夢中になつてその部屋へと入りました。やア、いふ簡單な挨拶でしたが、下女に何か命じて去らせる彼の面影を一目見ますと、不思議では御在ませんか、今の今まで清々とした顔で居た私の血が、急に凝結して、平素の冷たさよりは、既つと冷たい心になるやが出來ました。何故であるか、それは私にも解りません。御

在りますが、應酬の心には折々微妙な激動があるものと承ります。私は冷たい

顔で、冷たい態度で、冷たい聲で、別後の久闊を述べ、冷たい

い眼で彼の周章でた眼をうつと見てやりました。本能の作用で御任すか、然うするものが、何か非常に復讐でもしてやるかのやうに思はれたのでした。彼の容観ですか? 變つて居りましたとも、會て俱に涙を流つて別れました時の御は何所かへ滑えて了ひ、髪も生え、重味も出來て成る程立派な紳士にはなりましたが、眉から頬へかけて、いまだに忘れる暇もない昔の無邪氣な所がなくなり、始終苦い事を味つてゐる様な色が見えるのです。彼はやがて思ひ決した風に話出しました。

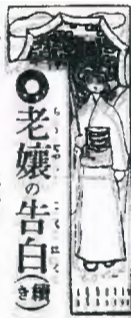
▲僕は非常に苦心をした、貴女にも大した苦痛を味はせた。今までを無言で過した罪は誠に申譯がない。畢竟は僕の意志が弱かつたのである。けれ共いまは過ぎた事ゆゑ、解解をし、とは思はれ。たゞ、僕の惡かつた事を悉く白狀して、斬ることも焼くことも貴女の御意のままの罪を受け度い、その爲めに應々やつて來た。貴女は檢事で裁判官、僕は辯護士のない正直な被告人にならう。たゞ夫

れだけの謝ひだ」と、云ふ事が斯らしく聞えませんでした。だが此所ではどうも話し難い、兎に角宿を出ませう。と、彼は旅裝の盛の洋服で、私を戸外へ連れ出しました。だが御安心下さい、私は其の時、恰も裁判官のやうな、冷靜な、嚴密な心になつて居たのです。私は自分の意志を信じて、彼と一緒に郊外へ志して、街から街を歩きました。(つゞく)



婦人俱樂部 (持寄る者)

▲小説「夕立雲」の房之さんと茂子さんに妻は同情します。國子さんと藤田さんはよくない人だわね、毎朝待ち兼ねて愛顔して居ります。が作者の御芳名が判らぬので残念です。御存じの御方は教へて頂戴な(著者へ讀者)▲私は夏休みに和料理の實地けいこがしたいのですが御婦人のお料理通の方で一寸した來客などにでもなす料理を教授して下さい方はございませんでせうか(日本橋の乙女)▲本紙上の「明日の献立」及料理の條を御覽なさい(記者)▲誰かとした信念から絶對的に一生を老練で押し通せたなら或は結構かも知れませんが世間には家庭の人となりて究極なる束縛を受けるが嫌やさに寧ろ浮世な生活をjして面白可笑しく暮らして見たいなぞとんでもない獨身主義を振りまはすお方があるから随分滑稽ではありませぬか千秋歌ヶ谷のますみさんぞやとお耳が痛くはなかつて(京橋はる子)



○老嬢の告白(續)

△死のやうな沈黙を續けたまふ私共は御所を横切つて、相國寺を抜け賀茂川の堤を越して、何時の間に下賀茂の森へ入りました。随分近くない道なので、下賀茂へ着いた時はもう夕陽の影一面に夕霧が立ちこめ、木の葉

の末に夕べの露が浮いて居りました。道々、私が何を思ったか、考へ

たか、彼は知り由もなかつたで御座ませう。抑黙りに黙つて歩いてゐましたが、ちよいと眼を擧て私の顔色を見ては、溜息を吐いて居りました。扱て愈々森の中へ入る、すると彼は獨言のやうに、あの時も森の中だつた!と申しました。廣島の最後を云つたものでせう。而して突然に私の名を呼んで「僕は結婚したのですよ」私は感ずす「そんな事だと思つて居ました」と云ひ回しましたが、彼はもう狂氣のやうになつて、「いや、

▲何も云つて下さるな」話してしまふ、僕から話します。」と少時黙つて、話し出した事柄は、かいつまんて云へばどうなので御座ます。畢竟、男は私を欺いたのです、と云つて悪い意味が

有つたのではない、矢張り愛の爲めに嘘を吐いたのです。元來、彼が洋行を致しましたのは、西洋人のお金で行つたのではなく、結婚の女の方から出させたのです。實は私と戀になつてから後、男はさる豪家から洋行をさせるといふ條件で養子に賣はれたのです。彼が行き度いと思つてゐる處ではあるし、根が餘り意志の固くない方ですから、兎に角結婚をして外國へ渡り、彼方で金を儲けて、負債を返すと共に破談にしようと思つたのです、無論私に打明けられる事でもありませんから、一人で然う心に決し、養家の金を持つて渡米しました處が、暫らく勉強してゐる中に、急に豪家から歸朝を迫られたのです。

▲歸朝すれば結婚しなればならぬ、結婚すれば私に申譯がない。さればと云つて破談する爲めの返金は出来さうもない、又不徳義に、一切を放棄して逃げて了ふとも彼として出来ないではあり、何分まだ三十に足らぬ青年の、種々と心痛をした結果、遂に私へはあの隠した手紙を送つて、義理を立てる爲めに、養家へ歸つて結婚をしたのだ相です。併し私の事は忘れず、何時も密々に動靜を探らした處が、果敢ない老嬢の生活を送つてゐる。それを聞くと、彼は自分の罪に責められ通し、如何に義理の爲めと云へ、自分の心得違ひから惹起した、勝手な義理の爲めに、女の生涯を破つて了つたのを堪へられ、苦痛を感じたさうです。感じながらも遂に今日となつた、けれども、遂に忍ぶことが出来なくなつた、よし自分を葬むつても、貴女の些しの満足でも買ひ度い。今のまゝでは死んで了ひさうだ。一体どうすれば可いか……」と男は涙を流して語り續けるのでした。(つづく)



○老嬢の告白(きり)

▲弱かりし過去。「一体どうすれば可い」と語り續けました男は、短かに過去の追憶に没して「僕が貴女に黙つて日本へ歸つた時、貴女に處れて結婚した時、その時の心持は今に忘れられぬ出来ぬ。あゝ何といふ凄惨な、意地のない男だらうと、自分で自分を罰けてみた、寧ろ死んで了へど呪つてもみた。けれ共、何て僕は意志の弱い人間だったのか?」結婚して三年目に、思ひがけない子供が生れたのです。

「私は有様に胸を打れました、愛のない結婚だとか義理だとか、勝手なことを云ながら子供が生たといふでは御在りませんか?」けれ共、私は皮肉に出て「結婚すれば子供の出来るのは當り前ぢやありませんか?」云つてやりました。すると男は首を垂れて「あア、運命を呪ふ人もあるが、人間は大抵自分で種を蒔いてゆくものです。僕も矢張りさうだ。併し、僕は生れた子供を捨てることが出来なかつた。憎いと思ふことも出来なかつた。憎むことが出来ないだけに、僕の苦痛は大きかつたのです。」

▲人生は實に矛盾だ。僕は今日までこの矛盾を潜つて來たのだ。けれ共、もう我慢が出来なくなつた」と男は熱し切つた調子で申します「今度といふ今度は僕も非常な決心をして來たのですが、それを打明ける前に、聞きたいのは、貴女が僕の過去を赦してくれるか?」云々といふことです。それはもう、貴女の立腹は承知し抜いて居る。たゞ、愛から僕

の云つてゐる事を察して何か一つ正直な處を云つてみて下さい」私は男の心を氣の毒にも哀れにも思ひましたが、今更ら何と云ふ事が出来ませう? お互の運命はチャンと決つて了つて居るでは御座せんか。で「私はもう何とも思つて居ませんから、何卒貴方が一生幸福に暮して下さるへすれば満足です」と云つたので御在ります。男は「否、赦して下さいませんか、ぢやアもう一つ御訊きするが、貴女は今も私を愛して居て下さるか?」これには私も困りましたが、思ひ切つて「私の愛は冷りません」と云ひました處が、驚くぢや御在りせんか、彼は矢庭に私の手を執つて「ぢや▲僕と結婚して下さい。僕はもし貴女の愛に冷りがなく、僕の過去を忘れて下さるなら、今の成道を打ち捨てゝ來たのです、お互にもう若いといふ歳でもないが、と云つて將來、心にもない生活を営み續けるには餘りに若い、何うか僕の心意氣を買つて、貴女も一つ、眞面目に考へてみて下さい」と、何所までゆけば解結がつくのか、本當に情けないやうな事を云ひ出されたので御在りました。私は、昔に變らぬ彼の感情の美しい點を認めないでもありませんでしたが、さりとて彼の意志の弱さを悲しまずに居れません、そんな事よりも何よりも、私が男の身さへ幸福であれば可いと思ふのは、決して嘘でも何でもありません、それに男は自分から幸福を破り度がつて居る、それが私の眼に明瞭に見えるのです、私は少時黙つてから、男の返めに説き初めました。(つづく)



老嬢の告白

▲戀人への忠告「戀は海に沈まないけれど」と私は然う説き初めました「私はもう昔の私ではない。貴方だつて昔の貴方ではない。お互に忍耐も加はり分別も出来て、境遇を破つて迄も戀に従つて行くほどの自願は出来ない筈になつて居ます。殊にお話のやうな身の上で在りながら、それを破つて昔の戀を温めやうといふやうな無分別は、決して私を満足さす方法ではありません。昔破れたのも本當だし、今一緒にならぬのも本當で、寧ろ此儘にゐてこそ私達の愛は未長く續くともありませうが、今更破倫な事をして迄も結婚せねばならぬといふやうでは本當の愛があるか何かも疑しい私は貴方が過

去に味はれた苦痛を聞いた

丈で澤山、それ以上の事を致した

いとは思ひません。よし貴方が今の夫人がお嬢で、それで私と結婚しないとい仰有り、結婚して貴方が非常な幸福を得られるとしても、それは貴方一人の満足で、私は決して満足が出来ない。つまり私は貴方から

▲捨てられる妻子を見るに堪へない、此儘で居れば居られるものが、僅か

の感傷の爲めに、二人と云はず三人と云はず、新しい犠牲者を出すのは一層の罪と思ふ。成る程貴方もお苦しいだらう、私も決して樂だとは云はぬ。けれど、貴方の苦痛は、當然貴方一人でお受けになる義務があるし、私の苦痛は今更ら結婚しても無くならぬ許りか、一瞬間になる。其結果は私を思つて下さるゝ私を苦めるゝになる。此上私を苦めるのは貴方のお心でも有ますまい。すると所詮貴方が結婚しんと被有るとは何の意味もないことになる意味のない事をして、又新しく人を苦しめるのは賢い事でない。貴方はまだお互に苦しいやうな事を云はれるが、私はもうお嬢さんのつもりで居る。いかに私の愛が溢らないでも、さうした譯であるから、結婚だけは御同意が出来ません。私達は犠牲になるべき身でこそあれ、犠牲を作へる身ではない。殊に私はもう

△二生の覺悟を定めて居ます私の生涯は世に棄れた捨て石のやうなものの塔の上の飾り石にはなりたくない、私は黙つて生きてゐて黙つて死んで了ふのが本望です。然うですから、私は貴方のお話を聞いて、嬉しくも思ふが悲しくも思ふ。無いお心だ

けは了解するが、此の上に奥様なりお子様なり、又は私なりを過さるさうでなさるのは間違つたと思ふ。だから、私の心がお解りになれば、私は此の儘にして置いて下さつて、私を愛する心を持つて、皆様の可愛がつて上げて下さい、それが私の唯一のお願ひでもあり貴方が當然爲さるべき所かとも思はれます。(つどく)



老嬢の告白

▲森の夕凧「ですから」と

私は思ひ切つた聲で申しました「此際には是非お考へを代へて、一時も早くお歸りなすつたが可いと思ひます。僅かの事から取回しのつかぬものになつては困りますから」然う云つて男の方を見ますと、彼は先刻から何か深く感じてゐる様子で、口が「成程」と頷をあげて「否、僕は大きに考へ違つて居た。貴女に今更に結婚

を申込んだのも、矢張り自分の苦痛を助けて貰はうとする弱い聲だつた。許して下さい、もう何も云ひません。過去の不人情を忘れて下さい。お互の境遇はもう固まつて了つた」と洗んだ聲でした。否、男の前方に宿してゐるなど云はしては済みません。でも有して下さ、黙かつた」と彼は何と思つたか。

▲私の前に頭を垂るのです「可けません、そんな事しては！」とそれを拒けさせやうとする途程に、私の手が彼の手に觸れました。今から考へますと其の時はどういふ心の作用で御在ましたか、その手と手とが些と觸れ合つたのが、まるで彼の心の底の心に觸れたやうに感じまして、私は覺えず戰慄致しました、だが怖れを伴ふ感傷ではなく、極スウキートな、そして激しい感傷を感じました。二人共、多分同じやうな感情を了解し合つたのでせう？ 暫らく黙つて了ひましたので。サウ、と木の葉の揺れる音が、靜かな夕暮の、人聲もせの森一杯に流れて、折々耳の傍を、小さな羽蟲が飛でゆきます。私の胸には、人生の種々の思ひが充ち溢れるやうに涌き上り、心の樋を滑つて、音もなく消え去つて了ひます、何となく恍惚して居ますと、彼が「では、將來は、心置かない親友として交つて貰ひ度」と靜かに申しました「え、夫から私からも願ひします。親友のやうにでも、兄弟のやうにでも」私は彼と、心で一つになるとが出来たので御在ました、けれどもそれは

▲嵐の前の平和に過ぎなかつたやうです。多時経つてから、眞蘭な森を出て、寺町の方へ道をとり、電車の處で右と左へ別れる時「では今晚の終列車で御發ちなさんですわね」あゝ靜かに、と挨拶した儘、いよいよ別れた車の上で私は不意に泣き出し度くなりました。もう行つて了つた！と心に叫びました。

あゝ、次第に戀の影が消えた十年間に、私は彼を思ひ續けて瘦せもした、病氣にもなつた、恥しながら胸の底には若しやといふ一種の望みもありました。併しもう駄目！彼は風のやうに來て、私の胸の隅えかけた火を煽つて、また風のやうに行つて了つた。あゝもう、と、お笑ひ下さい、私は車の上で唇を噛みめくして泣きました。私は又ヒステリシの癡に襲れたのです。私の心は私の態度を嘲笑しました「あの道徳家の娘は立派な立派な女だつた。汝は貞女だ、賢婦人だ、大教育家だ」(アッ、と)

大教育家だ！(アッ、と)



老嬢の告白 (續)

▲悲劇を作る性格 には二通りあると思ひます。一つは周囲の境遇から自分を破られてゆく人、一つは自分で自分を破つてゆく人です。何れにしても悲劇を作る性格で御在ませうが、私は身一つに此の二種の性格を経験致しました。幼時から處女時代へかけては、境遇の力で痛められ、それから後は、絶えず自分で自分を苦めて参りました。されば云つて、自暴自棄の出来る性格でもありません。私は自分より悲劇の性格に生れついた者と認めるより外に道がないので御在ませうか?……從來の運命を顧みると、恐ろしさに聲も立ちません。ですがまあ晩はよく我慢したと自分ながらに感心するのです、**燈の點いた處**、**暗い處**とを、**夢のやうに走つた**

とや、學校へ歸つて月のない一夜を窓際に坐つたまま、帯も解かず、思ひ出しでは泣き、泣いては考へしたとや、その翌日から寝付いて了つて、十日ばかり枕の上から無つた事や、今から思返しますに

▲卅三は女の厄歳 それが私にも附き纏はつたので御在ますね。其の歳は苦痛の復活と、煩惱の再燃とに慄まされ通して、呻吟ながら翌年の春を迎へました。男のとですか?さア、それらで御在ます、**一体男といふ者は、**

何處不實なのか誠なのか、**正直なのか、惡人なのか、一**

向分りませんもので、あんなに思ひ切つた事を打明けに来て、泣いたり頭を垂れたり、色んな事をして置きながら、國へ歸つたそのハガキを寄越しました切り、それから一言の消息も御在ません云ふ迄もなく、私から手紙のやれた義理ではありませんから、何も云ひ送りません、併し、あの惨の森で、せめて將來を

親しく交つてくれと云つた心は、何處へ消えたのでせう?女にもヒステリといふものがあつて、時々亂れたと云つたり爲たり致しますが、殿方にも矢張り同じやうな事があるものと思はれます。だが、慙懣を申しまして、私は決して彼を恨むのでは御在ません。寧ろ手紙の往復などは爲ないが可いと思つて居るので御在ます。さて一方で、私が同じやうなばかり繰り返して居ります間、一方で弟や妹が、伸々として成長致します、それを見ると、時間の力の思やかな事を感じますより

▲自分一人が取殘 されたやうな、何とも名狀の出来ない感慨に打たれるので御在ました。あゝとした感じが、老嬢になり初めの、必死した心持で御在いませう。三十四!三十四!美しい人は若く作つて二十三にも見られるのを喜ぶが、家庭を持つた人は、多くの子供に圍まれて、處女の美に等しいと云はれる母の美を示し、**女の美の最後の光**

榮を見せる時代なのでせうが、私は衰へて、隠れて、枯れてゆく一方です。有聲にそれ迄は感じなかつた、秋の心持が何所からとなく私の心に浸み入つて参りました。**次第に脱毛の増て行くのを知る時の氣持**

私は、女でなくては解りますまい。併し私は三十四の春、哲學を行つて居りました弟が、首尾よく帝國大學を卒業致した妹も専攻科を卒業して、春の休みに私と三人連れ、楽しい日を故郷に見て、老母を慰めるとなつたのが、まづ久々の幸福とでも申しませうか(つゞく)

老嬢の告白 (續)



▲故郷の嬉しさは何時も同じ事、年が老つても、母の膝許は懐かしいもの、久しぶりに弟妹を連れて故郷を省しまし、私は、暫らく雑念を忘れて、田舎の風光に氣を養ふことが出来ましたが、老いゆく母が萬事に代つても先づ私共を愛して呉れる心は、自分の年が寄ればよるほど解

つて参ります。私は一生子を持たず、子に對する愛情を了解する事が出来ませんでせうけれども、子を持たずして、何は母の愛を知る事が出来た。私は一

生子供、なのです。子供のやうに無邪氣に楽しく暮すが出来るか何うかは疑問であるとはいへ、静くも母の前に在る時だけは、永久に子供のやうな心持を失はずして居る事が出来るで御在ませうこの意味で、私は自分の愛情や、苦痛やすべてを母に掛ける外はないと感じました。勿論、私には兄弟がありますが私にとつては

▲兄弟も一種の苦痛に過ぎませんでした。否、兄弟ばかりでは御在ません、僕でも、これから思つて、立派になつて、思ふ通りに人生の幸福を受けるもの出来る人、一言で云へば、是から

榮えて行かうといふ人は、皆な

私の敵だと言ふに、思はないでは居られなかつたのです。あゝ何といふ醜い考へ方で御在ましたでせう？併しお察し下さい、私のやうな境遇に育ち、私のやうな絶望を味つて参つた者は、人の繁榮に對して、心から嬉しさを感ずる事が出来なもので御在ます。私は自分を犠牲だとか何とか立派に廣告して盡きながら、心では若い者、繁榮してゆく者に嫉妬の爪を磨いたのです。私は遂に弟や妹にも、この反感を禁める事が出来ませんでした。それは恰度私達の歸省中に、妹の縁談が持ち上つたからでも、つたでせうが、私の神経は無暗に興奮して、

▲若やかな妹の態度を見る毎に、随分當てつけがましい忌味を並べ、後で一人で後悔して泣くやうな事が度々でした。全く私は、兄弟にも見離されるやうな、心細さに取巻かれました。彼等の血氣に充ちた、人生の春を十二分に楽しむと云つた風と、自分の次第に衰へて、益々醜くなつて行くことが、恐ろしいほど明瞭と解り、お終には、彼等が私を笑つて居るやうに思はれ、それが酷くなる

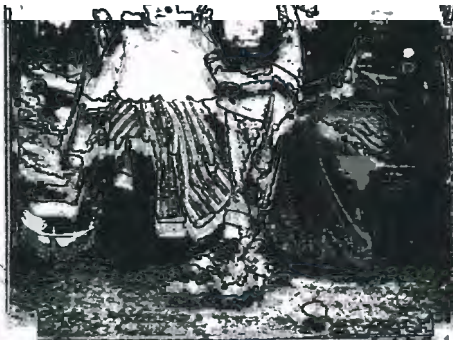
と、自分が彼等に殺されて居るやうな、恐ろしい不安に

襲はれたので御在ます。然うなると今迄樂しかつた故郷も他人の家と違はず、慈愛深い母までが、弟や妹の事はかりに氣符を折つて、一向私の事を考へても呉れないやうに思はれ、自分で自分を醜子にして、怒つたり泣いたり致しました。そんな譯で折角歸省して晴れやかにした心も暫くの間、又一層の暗雲に覆はれて了ひ、妹の結婚談を聞くのが何か非常に嫌味されるやうにも思はれまして、汗の出るお話ですが、私はどう／＼急に一人で京都へ歸つて了ひまし

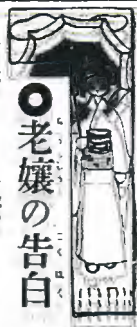
保日 憂九 傍八 本 主 脚

に離れるに決めて、學校を辭したとて御在ます、此間までは、あつた親しい中でありながら、私に一言の相談も無き人生の大事を取り決めたとは、太く私の氣に刺りました。それよりも何よりも、**自分親しい者、自分を愛する者、次弟自分から離れて行つて了**とは、何れほど私を悲まされた御在ませう。眞には戀人から捨てられ、今は父妹や親友から遠ざけられる。私はもう、愈々孤立だどさう感じない譯には参りませんでした。併し、永年の獨身で練へた心は恐いもので御在ませんか。私はもう泣くとも、怒るとも、以前のやうに酷くはありませんでした。却つて、何か慈う皮肉な、冷笑的の態度になりました。世間が私を捨てるなら、私も

▲世間を捨て見せる と云ふやうな、間違つた考を生しましたので、エれからご申しますものは、出来るだけ人の缺點に眼を注ぎ、人の弱點を擧げて、冷かに嘲笑つてやるやうな、醜く心に



▲面白からぬ故郷を去つて、京都に歸つて参りました私は、此處でもまた面白からぬ事に待ち迎へられました。それは私が歸りますと前後して、豫てお告め致しました私の「ヂャレスト」が、急



●老嬢の告白

りました。私も世間普通の老嬢になつたので御在いませう。其頃から、随分勝手な事を高言して、同じ教師仲間や生徒からは、次第に嫌はれるやうになりました。それを知ると、損得の老へはなくなつて、一層反抗的に、嫌やがられるやうな事を爲るといふ今から思へば汗の出るやうな態度をして、い事に考へて居りました。私はあつた頃の自分を振顧つて、人間の身体と心との關係が、實に微微に出来上つて居るのを驚くので御在ます。扱て然うする中に妹も友達も結婚致し、弟は再び東京へ出て大學院に入學致しました。私の心はますます頑固になりました。あの體で存つたなら、恐らく私は木伊公のやうになつたので御在ませうまた然うなつてゐた方が可かつたのかも知れません、處が何といふ

▲元戲好きの神様で御在ませう。間もなく千羽になりかけてゐた私の前に、又一つ、新しい誘惑が投出されました。あゝ此の誘惑、これは實に、私の胸に消れ發つて居た血汐を、再び沸き立たせ、**今一度花やかな人生**に憧れさせ様とした、恐るべき誘惑なので御在ます。そして此の誘惑は私の女としての生涯に、最後の思ひ出しの數々を作らせました。あゝその思ひ出し私はそれを讀す必要がありません。思ひ切つて正直に大膽にお話致しませう。(つづく)



○老嬢の告白(續)

▲新しい誘惑とは？ 私が三十
四の秋頃から、同じ教會へ顔を出した青
年と、私との關係なので御座います。此の
青年は一見十八九歳の、色白の小
柄な、憂ひ顔に涼い眼を持
つた、極天才的青年で御
座りました。申す迄もなく、神戸とか京都
とか、東京に亞つて大教會には、始終二十
八三十人の青年信徒がおりますもので、
それが悉く、教會の事、傳道の事と云へ
ば、學業を忘れて迄も奔走致します。今
私の心持から云へば、幾ら信仰の爲
めでは云へ、まだ何も得らぬ青年の分際

で、本職の勉強を捨てゝ迄も、牧師の手
先に使はれて居るのは、苦しい事の極
で、又それを好む事にして、分別心もつ
かね子供を騙して上げる牧師や執事に至つ
ては、殆んど天使のやうな顔をした惡魔
で、さなくとも神學的の青少年を、いや
が上にも感情的に教育し、智識や意思の
發達を誤らす者で御座います。私は牧

師程人の子を損ふものは無

いと思ふのです。だがそれは枝葉の事
でした。今悠うした事を云ふ私でさへ、
時に置きましては、健康な青年が、その

△紅顔に涙を垂れて祈禱する

熱誠には、何時も無限の慰安や、養育を
感じて居たので御座います。出来るだけ彼
等を指導して、感情の不足な所を補つて
もやみ度いなと、柄にもない希望を抱
いた事さへありました。殊に御承知の通
り、私は寄宿舍を預かつて居ります以上
毎日顔を附き合せて居ますのは、妙齡の
娘達なのですが、此の娘達といふものが
些度見には誠に無邪氣な

い、花のやうに美しい者と見え

致しませうけれ共、何うしてノ、まる

一日でも一緒に住ませうものなら、妹
をねみ、唇口、告口、よくもあんな口が
利けたものだと思ふやうな、姫御前のあ
られもない本性を遺憾なく發露致しまし
て、實際嫌氣が差さないうでは居られませ
ん、加之に、女といふものは、男の前で
は何彼と美しく取繕ひ、人によると、
随分作り勢などを致します。それが女の
眼には直ぐ解かるものでして、あゝ又

男に媚びて居る、といふやうな

御座います。然うした者を永年世話して

居ますと、事實、嫌な事ばかりなのは當

り前では御座いませんか、つくづく嫌にな

つた所へ。

▲淡泊した男の子を見ますと、

それは如何にも立派なもので、邪念もな
く、陰謀もなく、本當に嬉しく慕はしい
者との感じが自然に湧いて来るので御座
います。そんな中で、一体私は女が嫌ひ
其の代りに男の子を好くといふ風でした
が、中にも、小痴教者のやうな、健康な
青年クリスチャンの、まだ罪も汚れもな
い、生れた儘の心を映じだした眼附は、
私に取つては沙漠中のオアシスでも思
はれ、何時も日曜日の禮拜や、金曜日の
總會に彼等と出會ふのを樂みにして居り
ました。その金曜の一夜、窓から忍

び入る秋風が聖壇の上の

芭蕉竹の葉を翻へす夜で御

座しました。私はその忘れかねる青年と知
めて顔を見合せ、世の中には打ち惚れや
子供もあるものだやうに、嬉しく感じ
ましたのが、そも／＼此の一揮話の面
因なので御座います。(つづく)



老嬢の告白 (續)

▲また不思議な事には、その昔年の眼が、初めての祈禱會の夜も、次の日曜の禮拜にも、眠さへあれば私の眼を瞞めて居るでは御座ませんか。注意して見ますと、まづ中流以上の子供でせうか。小清満した風俗をして、第三高等の徽章のついた新しい帽子を冠つて居ります。別に苦勞をした事もない様子で、それで居て眉の邊りが曇つて居るのは、確かに始終何事かを思ひ考へして居るのだらうと察せられました。それにしても、あの無垢々、憂鬱々胸に何事の思ひが秘られて居る事か、よく會室などでも、群から離れて唯一人小首を傾げて居るのが、非常に私の好奇心を惹きました、一つ機會があつたらば、

話し合つて見たいものだと思ひ／＼するので御座りました。する中に、その青年の名も知れ、それが文藝科に居る事も知れ、小説や新俳詩の上手な事も教會の會報に出た彼の作詩で知る事が出来ました。さう然うなつてみると、私はその青年が▲可愛くて堪らない。もう自分の子か何ぞのやうな氣がする、それが向ふにも通じないでは居りません。會室の入口で出會つたりすると、例の妙に小首を傾げて會釋をする様になりしました。そればかりか、私が寄宿舎の生徒の列について、學校から教會へ参ります時分も、一人で散歩に出かけます時分も途中でよく彼に出會ひます。出會ふと決度向ふからお辭儀を致します。妙なもので御花まして、向ふから注意さればされるほど、此方からも注意を拂ひ度くなる。或日の事で御座りました、矢張り禮拜の歸りがけ、私は都合で、一人で歸つて参りますと、背後から聲をかけて、力の籠つた聲で其青年が呼び止めるのです。獎勵して私に近寄つて、僕は些しお話をして頂き度い事があるのですが、御急ぎでせうか」と云ふので、如何にも私を信頼して何もかも授出して丁ふといつた風に、また私に見えたので御花ますね。否、別に」といふやうな譯で、道々も話しながら、私はその青年を寄宿舎の▲私の部屋へ連れ歸りさてお茶やお菓子を要めるのでしたが、何故で御座いますか。私は嬉しくて、それはして居りました。年甲斐もない事を云ふとお笑ひかも知れませんが、併し事實の所、私はその人懐っこい、その癖に何所か恣に打上つた青年に魅されて了ひまして、俄かに自分も若くなつて、此の子供のいふ事ならは何でも聞いてやませう。それにしても、何と思つて、何を語らふとして、彼が私の所へ來た事か、と私は庭でそれを訊ねたので御座りました(つづく)



▲僕は養子の身ですが、其の

青年は信う話し出しました。實はれた養家は神戸にあつて熱心な門徒である。僕は今京都の親類に来て居るが、深く人生の事を考へる。何うしても今のやうな生活に甘じて居る事が出来ぬ。それで教へも自然に足が向いたのだが、實は今一つの理由がないでもない。それは、僕

の養家の父母に些しの愛もない事で、其の上、自分の實父母も兄弟もない事ゆゑ、信仰の上にも、人生に處する上にも、誰一人として自分の味方になつてくれる者が無い。味方を探すのは男らしい事でないが、誰にしても、眞に自分の

相談相手が欲しいと思ふのは

耻かしい事でない。夫で、あまり突飛なやうであるが、何うか將來折々の忠告をして頂き度い。とまあ、大体が然うした頼みなので御座りました。色々聞いて見ると、怎うやら本心から

▲私を頼つて來たらしい。それだけでなく私の心持は以前から此の少年に傾いて居たのです。兎に角其の日は、私も眞面目になつて、青年時代の危険な事や、これを切抜けて行く覚悟や、然うした事を説き聞かせ、將來は、何事に就ても、相談相手になりませう、氣を大きく持つて、自分の信じる所へ進むやうにして下さいなどと、限ましい事を云ひ聞かせたので御座りましたが、心は口と

反對で、怎うすれば此の青年を自分に引き着ける事が出来るかと、そんな不埒な事を考へて居たので御座りました。併し私の説教が、純粹な少年の

心に、何んな感銘を與へましたものか、夫からご申すものは、彼は次第に私を信じて、身の上の秘密や、人生の不思議な事や、神秘的な事や、私には恰で解らぬ話をして、喜ぶやうになりました。

本筋に云つて了へば、私は彼の話す事柄を面白いと思ふのではありません、唯

▲彼の勤がす朱の唇、その首、その眼附……一口に云へば、彼れ自身を見るのが嬉しいので御座りました。それで、何かと口實を作らへては寄宿舎へ招んで私の傍で暮らせ、その嗜きだといふ御馳走は、自分の手で作らへて食させる。

恰で母親が親身の子供を可愛がるのと一つに可愛がらねば氣が済まぬやうになりました。はては毎日、日として彼の姿を見ぬ事はなく、若し稀に出會へない日は、乾度手紙を往復するといふ、殆ど

と感謝、溺愛の日を重ねたので御座りました。勿論、日曜日などは、教會が済み次第に近郊へ出かけるとか、何とか、出来るだけの愉快を盡して、終には、二人の間の隔ても次第に失くなり、私が「これ」と云つてその名を呼び棄てにすれば、彼は「母様」と云つて私に甘へ

かゝる。誠に他愛のない、花に舞ふ蝶様な、楽しい事で御座りました。だが怎うした日が経つて、次第に二人の親しさが増すに連れ、私は何となく、恐ろしい不安に迫められるのを禁め得ませんでした(つづく)



老嬢の告白 (續)

▲の感じた不安とは、申し上げ

げる迄もなくお察して御在ませうが、實に私は自分の意志の力が、この青年に對し同時に施つて了、初めは此方に向ふの感情を支配して居ましたのが、漸に向ふの力に敗れ、彼の感情に従がで私の感情をも左右せられるやうになつては、彼に感情を允許する爲めには、己の機嫌を拂つても好いといふやうな情になつたので御座います。これが、彼を同ひます時には、さのみ不安でも御せん、さうするの、其の刹那は、全く私の意志がなくなり、感情ばかりが鋭くつて、何

感情ばかりが鋭くつて、何

かを彼求めて居るからで御座います。けれども、一人ゐて静かに考へてみ

する時は、思はす身戦ひを致しまして、間もなく自分に迫つて来やうとする不安、危険を思はないでは居られませんが、思はす、そんな機で一生涯を誤るゝ事が出て来ないものでないか、その疑問、恐ろしく思ひ到る、私はもう、どうすればいいだらうと云ふに、頭立ちで御座いました、けれども、私は既に昔の儘の私ではなく、種々の経験を経て、人々の何事をも心に、事及ぶよある、

▲極めて大膽な女になつて居

したので、那方から云へば、將來を恐れて自分の慾を制するよりは、自分の慾の爲めに小々の危険を冒しても好いといふ始末の悪い性質になつて居たので御座います。私は、世の中に何が恐ろしいと云つて、三十女の無分別ほど恐ろしい事はないと存じます。三十女には希有がありま

年をとつてから、獨身で居る女は、度若い青年の感情の味を知ります、何うかすると夢中になつて騒ぐもので御座います。事實、心の状態から云つても、身体組織から云つても、中年の女は、さうに恐ろしい

つて見れば、私もまた、その危なつかしい時代に、丁度その危なかつた誘惑を受けたのです。身体が發達しきつた中、女と、感情の奔放な青年と、この二人、よし世間体はどう繕らつて居りますとも心の中で、不安を感じないで居られやう譯が御座いません。けれども、不安を感じた所が何になりませう。さうした事を怠る頃には、もう夙くに

▲者か囚へられ

そして身動きのされぬ事になつて居りますもの、然うして、私も其の通り御座いました。自分で自分の弱點を覺り、一方には、さうかして此の弱點を、要するほど淺ましい欲望に驅られて、小々の世評も氣に留

す、青年との往復を益々頻りに致して居りました。最後には、青年の方から無垢一方の感情だけで、「母さん、」と云はれるのが、何となく不愉快に思はれ、もつと、隨てをこつた、心と心をびたり合すやうな親しさになり度いと思ひ、するで御座いました。その結果、こゝに、私は出来るだけ大膽に、自由に彼を取り扱ひました。次第に禮儀を失ひ、致しました。然うして彼の態度の日増に打解けて参りますのを、大早の雨をひやうな心で待つて居たので御座います。(つづく)



老嬢の告白 (きん)

△徳操の危機 とも云ふべき日、此大
館に近づいて参りました。私は青年を愛
する以上に親しみ、親しむ以上に押れる
方針をとりました。否、自然と然うし
た順序を探るやうに、私の本能が餘蘊な
くしたので御在ます。私共は一緒に喜
を懐きました。私共は一つの食器で食事
を致しました。一つの部屋で半日も一日
も暮らしました。私共は又應用だも云
つて、折々一緒にアルコールを飲みまし
た。一緒に散歩するのは常の事、日歸り
の旅行などは、間がな顔がな、都合をつ
けては致しました。私共は機手致しまし
た。口づけを仕合ひました。併し、悠
するにも、青年は恰で母に對する態度で
それ以上、些しの不都合な點も見えませ
ん。無論私にも多少の道

念御在ます。ある程度までは接

近致しまして、それを越して道を破る

やうな事は、決して致しませんでした。

それは、實は自分の道念からよりも、世

間を恐れてよりも何よりも、この無垢の

青年を犯すに忍びなかつたからで御在ま

す。従つて、私は矢張り。

ました。少くとも、彼の感情を
弄そんで、その發育すべき道を
曲げたのは事實で御在ます。それ
處ではありません、前にも申し上げた
通り、どうすれば此の青年を、まるで自
分の者に出来るかと、強ちに心を砕いた
ので、事實、私は此の青年の奴隷になつ
て了つて居たのです。初め、いかに年陰
が速よとは申せ、親子でもない男女が、
悠うした關係になつて見れば、これを見
る世間の眼は何と思ひませう？それでな
くとも色を若けたがる人の口ですもの、
私の同僚は更なり、口さがない女學生
などは、直ぐに露口を初めました。併し
私の機敏が、院長に亞いて居ました爲
めか、表面は何でも有りません。たゞほ
んの露口です。けれども、人の口には戸が
閉てられませんが、彼等は、私共が何處の
宿屋に泊つたとか何とか、随分聞き辛
い批難の聲が高くなりまして、有隙の私
も多少は世間に憚からねばなら
ぬ仕立とまで、形勢が緊つたつて参りま
した處が、幸々事に、院長は私を以て
つて二となき者をやうに信愛して呉れて
居ます。その大木の下にゐるお蔭で私
は永く袖も濡らさずに居る事が出来まし
た。然うして居ます間に夏休み、あゝ
夏休み！あゝ此の夏休みの暑さを避
けて、綠葉に風通ふ須磨、孫子、我を忘
れて日々を明石の浦の夕波に飲まれまし
た事が、遂に私の半生を覆へ
す動機を生みました。返す
も残念で御在ますが、また其の危機の一
部始終をお話して、前車の轍を履まね後
車の轍ともなりするならば、健らかに私
の本望も足りるまいもので御在ます。

自分の欲望と矛盾した、辛

い樂みを樂みとして居ねばならなかつた

のですが、併し厳密に後悔致しますれば

私は精神的に、確かに此の青年を犯し



●老嬢の告白(き)

▲須磨の二の谷と申せば、義経の鶴越で有名な一の谷に隣り合せた、夏は涼しい谷間で御在まして、此頃では七八軒も別荘が建つて居りますが、當時はまだホンの一二軒、西洋人の住居があつたばかりで御在ます。私は、その西洋人が歸國した爲め、一夏を留守居旁々、別荘に費す事となつたのですが、然う

と決つた刹那から、私の胸に一つの希望湧きました。それで早速昔年を説いて、是非此夏は須磨の別荘へ来て、私と二人で楽しく暮すやうにと懇めました。彼は案じたよりも易く快諾して、夏中の旅物を取揃へるやら、海水浴の道具を買揃へるやら、まるで子供のやうに活き立つて其の日を待つ事となり、私も亦彼の喜ぶのを見て人知れず喜びに胸を一杯にするといふ

譯で御在ました。あの頃は、私も餘程變な女になつて居たに違ひありません。扨て夏のお休みが来る。片附けるものも片附け取、私、私は彼と謀し合せた時間の汽車で、一緒に須磨へ来て了ひました。此處まで来て了へばもう

▲自由の別天地で御在ます。誰に氣兼ねする苦勞もなく、朝から晩まで彼が私のものになつて居ます。二の谷はもと一山と川と樹立とに裏まれた谷間の事ゆゑ、此處からは彼も外に出ず、私も出ず、居る者としては下女の外に私運ばかり、聞き飽きる程相互の聲を聞き、見飽きるほどにお互の顔を見ました。あゝ戀は貪婪なもの、私は彼を喰べて了ふ心算でも居たので御在ま

そう？實を申せば、彼が私を寄宿舎に訪ねて参りました時節は、彼の全心が私にあるにも關はらず、血の燎えたつ若い女學生が、よと彼に語を云ひかけたり懸けられたりする時分に、云ひやうのない嫉妬を感じました。私も、此處へ来てからは其の心配もなく、悉く彼を獨占致したので御在ました。霧晴れやら雨夏の朝まだきに、私共は手を引き合つて、谷間の林を歩き、月明らかな夜は、

彼の横笛に合せて、私の琴の音林の空氣を震動させて居たで御在ませう。然うやつて居ります中に、私の心は益々若やいで参り、血潮はいよゝゝ湧き立つて参りました。時とすると一身を投げ出して

▲彼に愛を教へようかと思ひ悶えたがらゐ、辛うその激しい慾だけは取り抑へるゝが出来ましたけれ共、何を隠し教しませう。私は自分から彼の足許に平伏なかつた女で、彼を私の前に降伏させやうが爲めには、凡ゆる誘惑の手段を試みたので御在ます。然うして一ヶ月ばかり暮して居ります間に、私はある日、思はず、心中に驚喜の聲をあげました。あゝお聞き下さい。

今が今まで、私の誘惑手段に對して、何の感情をも生ずる事の出來なかつた彼が、彼の眼が、其の日は特別の光りを發びて私の心に對つたので御在ませう。私はこれ迄、さうした意味のある彼の眼を見た事が御在ませんでした。斯へるやうな苦しきやうな、例の緩みと肉の緩みとが、まさしく彼の瞳に流がれて、語らず云ざる要求を、直ぐ私の前に見せたので御在ます。その眼は、も

う以前のやうに單純な愛に満足する眼ではない。あゝ、二人の間は餘りに近寄り過ぎました。それは好んでした事では云へ、慙うなつて見ると、私にはもう分別がつかせん……あゝ危ない！危ない！私は畏れながらの、喜びの聲をあげました。(つづく)



老嬢の告白

▲彼の態度が急變 致しましたのを見て、私は心に驚きながら、危ない／＼と打ち叫びましたが、それと共に種々の感慨に打たれないでは居られませんでした。先づ第一に感ずる所は「私は勝利者だ」と云ふ事で御座います。若い一個の青年を征服して、彼の心を私の方へ向けしめた事、この一事が凡ての私の満足で御座いました。まだ戀を知らなかつた無垢の青年が、女ごいふ女の多い中で、特に私に心を寄せたのだと考へますと、私はもう、無限の満足を感じました。併し彼が自分の膚であると思ひました刹那、私は夫から一步を退めて、彼の肉体を傷にする氣には、どうしてもなれませんで御座いました。もう十分だといふ心持が久しく鈍れて居た私の良心を呼醒了ましたので御座います。すると私の良心は、この青年に接近し過ぎて居た私の不都合を一息に叱り飛ばしまして、再び以前の立ち離れた、嚴格な老嬢の心を呼び戻して呉れました。これは確かに私の勝手で、青年に對しては何とも申譯のない事で御座います。所が幸福な事に、彼もまだホンの子供なのでしたから、私の態度が變ると一緒に、▲倏ち謹嚴な青年と變つて了りました。けれ共私は彼の表面だけを見て安心するほど馬鹿ではありません。彼が人知れず何をか腹想してゐる所を見る度に、あゝ悪い事をした、とさう思ふのでしたが、どういふ關係になつては、

決して前々のやうに、自然に親しく出来る筈のものではなく、何か知らぬ一枚の隔りが二人の間に永久の垣を作つて了りました。さうして、私は彼を振捨てて了ふでもありません。何故なら、彼は十分に私の缺點を擧げて居るからです。それ故、私は熱から冷たから一定の熱度と、離れ過ぎず近附すぎぬ距離を以て彼に對しました。誠に、自分ながら天晴れの手練手管であつたと思ふ程に、當時を追憶して亦面致します。亦面も一通りの赤面で済みますれば御座います。此所に困つた事が出来ました譯は、然うして私と青年とが、僅か二人で避暑して居りました二谷の別荘へ、突然に京都の女學校から、平生仲の悪い女教師が遊びに來まして、二三日滞在した中に、▲見る目嗅ぐ鼻の面も有りもしない事柄を、京都へ歸つて院長に告口されたのが、そも／＼の體面で、やがて急いで院長から私を喚び返す手紙が參るといふ従前にない大騒動を惹起しました。恰度その手紙を讀んで、どうしやうかと考へてゐる所でした。彼が参りまして大膽を振ねますから、其の通りに話しますと、有様に彼は青年の、倏ち顔色を變くして「失敬な院長だ」とか何とか、頻りに催促して居りましたが、遂に私と共に、慫慂に住み慣れた別荘を去つて、彼は故郷へ、私は學校へと立別れて了りました。歸つてみると案の定、院長は大の不機嫌で「貴女にも似合はぬ何故そんな若い男と……」といふやうな譯なので御座いました。(つづ)



●老嬢の告白(續)

▲生涯一度の立腹 院長の不機嫌は、私に對する胸を打つて、成る程驚かした。自分にも妙なからず後悔を致した。たけれ共、私は自分の處を打破つて迄も、それを悔悔する氣にはなうして成れませんでした。反つて「これは異な事を承ります」といふやうな態度で、窮鼠猫を咬むの聲に漏れず、非常に院長へ喰ひかゝりました。私は、どういふ譯ですか、其時は本當に口惜しい氣持が致しましたので、一休そんな事は誰から聞きましたか、知れぬが、人の徳を傷けるも甚だしい。日本の女は貞操

を命として居るが、私はそれを誤解された以上、取も直さず殺されたと同じ事である。貴女は無實の刃を以て私を殺さうと爲さるのか」と、

真剣になつて立腹致しますと、今度は院長の方が狼狽し初めまして「實は人の口を信じての事で誠に申辭がない」と謝るのでした。然うなるに私に十二分の強味があります。人の口を信ずるにも「ある」と怒りたてし、遂に院長の口から、此事を傳言した例の同僚の名を吐かせると同時に聞き直つて私は

▲院長と同僚の不信 を並べ立て、そんな輕微な人と共に、重大な教育事業に從事出来ぬ。私は今日限りお暇を頂度い。併し私が退くと共に、その不信な女教師の首をも

斬つて頂度い。彼女を首斬るのは、教育家でありながら人を誤まつた罪の爲め、私が退くのは誤解を受けた所に居度くない爲め」と、さも正義らしく、憤慨らしく、聲を大くして申出たので御在ます。この計略は思直に院長を迷すには十二分の功を奏しまして、院長は自分の不徳を謝し、浮説を傳へ人の徳を傷やうとした某女教師を辭職さすから、怎か踏留つてくれるやうにと、再三私を和めました。そして、急に其女教師を學校から追ましたが、私は尚ほ正義の風を焚つてそれだけでは一度毒を飲ませられた私の精神が靜まらぬゆゑ、是非に辭職しないとい止められるのを無理に振り拂つて、

どうも我れと吾が半生に打建て來た勞力を一時の感情から引き崩して了つたので御在ます。私は此處に、此事に就ては何事も辯護致しません。たゞ

▲私は罪人であつた と申し上げるより外はありませんので、凡ては御推察にお任せ致します。兎に角、私の半生はこれで水の泡と消えました。自分の心から出た事なれば、誰を何とかが恨みませう。幸に幾らか溜めて居りました貯金を富座の藉みにして、私は別

の方面に職業を求め初めたので御在ます。青年の事ですか？夫は須臾以來、いまだに同じ様に安樂に居ますが、三年ほど後に、彼は養家の都合で學業を止し、今では家に歸つて、平凡な主人公となり、子供も去年の暮に二人目が出来しました。無論私とは何の關係もありません。變れば變るものとは、

本當に此の世の中では御在ません。かうです。私の生涯もそれから大分變つた事を経験致しました。お話しついでですから、全然申上げて了ひませう。(つづく)



老嬢の告白

△一步の先は闇暗 人といふものは、其の事が済んで了ふまでは、何事も譲り得るものでは御座ません。私も、一時の行き懸りから、學校を出て了ひます。是は、眞逆、さうした事になる運命とは思ひ寄りませんでした。併しゲエテが申しました、人間の運命は

刹那定まる」と。眞に、その利

那の事柄は、とても人間の智慧や力

で、明する事が出来ません。扱て十

年、教育の任に當つて居ました學校

を後にした私は、さる人の盡力で、東京

へ上り、ある女子の寄宿舎を預かつて、

自分の心を休める事に致しました。其時が

明治二十六年の十一月、關子坂の菊の真

夜、時分を御座りました。春ともなれば、

別に一事業を起して、女盛りの技

倆揮ひ度いさう思ひし

居たのですが、それよりも何よりも、

年若い人達の樂しむ姿を見、燭火眩しい
銀座のレストラント、本郷のカフエ
ーに夜光の杯を舉げる青年男女を見ます
毎に、何故私も、もつと早くから東京へ
出て来て、十分に華やかな人生を味はな
かつたのであらうと、存れてゆく自分の
命を惜しくも感じました。さては又た、
津田梅子、矢島樺子と
何故あの人達のやうに十二
分の功名心を抱いて女子
教育界の花とならなかつたので
あつたか、老ひゆく時分の運命を叫
ぶ感がありました。けれ共、私もまだ四十に
は間がある、人間は

▲以後が本當に働く時代ゆゑ
私も何かの事業に自分の名を記し度い
幸に、弟も下度大學院を出る歳なれば、
彼を顧問にして、日本にはまだ發達して
居らぬ一大婦人雜誌でも

發行し度いと、今から申せば凡て盛
榮の計畫に日を消して居りました。それ
で、多時は又男のやうになつて、知り合
ひの先輩を訪ねるさか、同郷の富豪に取
り入るとか、着々として將來の

野心を満足させる運動に取
りかゝります。一方では弟が首尾よく大
學院を出て、某出版會社へ入社致し、
國許の母を喚び寄せ、秋をも迎へて堂々
たる一家を構へるといふ、理想通りの筋
に運びました。これで遅くも三年の中

には、弟も博士になり、私も大活躍者にな
るといふ、まさに都合の好い手順であ
つたのですが、私の一生は飽く迄皮肉に
出来上つて居ると思えます。

△その骨肉の情愛は有聲に私の
心を刺さ立て、かつ弟が次第に紳士らし
くなつてゐる變化も、昔のやうに私の苦
悶の種とならず、平靜無事の日を過して
翌年の初夏を迎へたのでした。併し、い
ま迄を心長閑々舊都に暮しました私は
急に激しい競争の都に慣れ
るのが困難で、何時も、自分が
取置かれてゆくやうな感じに身を迫めら
れたもので御座ります。況して上野の花に



○老嬢の告白(續)

▲皮肉なる運命 私の生涯の凡ての事に附纏つて、一つの事が、その絶頂に到着しやうとする途端に、山の上が谷の底へ、何時も私を突き落し、するのでした。弟の方針が定り、私の結婚する親戚事でも、略言だけが無理ならうとした時に、矢張りその苦い経験と縁回されたので御座います。

▲某男爵家の令嬢で、私が東京へ参りました時分から縁談が進み、弟が家を持つと同時に、目出度く結婚の式を挙げたので御座いました。此の縁談に就いては、私は表面は賛成致しましたが決して、心中では、これは決して釣合ふ縁でないと思つて居ました。併し先方は弟の學識に惚れ込んで、是非にも懇請し、弟の方も全然素氣になつて居たものですから、私も別に異議の有りやう筈がありませんでした。所が果して、結婚してから、弟嫁としての彼女を見ると、

▲世に謂ふお華族育ち、右の物を左へするでもない。口は日化粧に浮身をやつして、朝から箱物に圍まつて居やうと云ふ、兎ても私共の家庭の主婦としては何一つ動りさうもない様子でした。私は体の好い食客ですから、別に何んぞ云ひやうもありませんが、従前數千

たは息がれた間とは

の女學生を扱かつて、一目若い女の性質を見破る丈けの

修養を積んだ身には、全く此の弟嫁が、空恐しいやうにも思はれました。東京の華族といふものは、其の子に一体どんな教育を施して、どういふ生活をして居ますものか、第一にそれが

私の一大不思議なので御座います。それで、所詮は生活の程度が異なると仰ふ、先づ總めて居るより外はないと考へても見ましたが、一度この家へ嫁いで来たからには、此處の家風といふものがあらうぢやありませんか。最負目で見ましてさへ、弟はまるで従者のやうな態度で、何につけても權を振ふものは嫁なので御座います。初めの間こそ我慢もして居ましたが、長い月日の間には私もつひ

▲黙つて居られぬ事 がある、それで一言二言注意しますと、それが直ぐ男爵家の方へ傳はります。それでなくとも可愛い娘を嫁づけたのですから、私から何かと望の干渉があり過ぎる處へ、義姉様があつた、かう云つたと云ふ告口なので、それで二三度重なつた時には、里の目には、まるで私が

娘を取て喰ふ鬼とも蛇とも見えただので御座います。一日、突然に

嫁へ迎ひの車が参つて、それぎり歸つて来なくなりまして。驚きましたのは、私の母、これは一体何とした事だと先方へ懸け合つてみると、歸り度いのだが、義姉様が苦めるから、と云挨拶なのです。そんな風ですから、他は大抵御想像がつくだらうと存じます。(つどく)

▲我儘な弟嫁の申條に腹が立たないでは有りません、又それを喝破するだけの云ひ分が私に無いでもありません、それ其の手はまだ二十になるかたらの小娘、私は世智を情んだ中どの女、こゝで言へば勝つには決つて居るとしても、私が勝つて納まらぬのは母や弟の心で御在ませう。況して私は一生誰の家の御座るべき身でもない。それが頑張つて居る爲めに、幸先の永い弟を淋しくし、その家庭の不和を築すやうな事があつては、老母に繋ける心配の程も思はれ、



○老嬢の告白

へは不孝」弟へは不孝の身とならねばなりません。それは私の望みの所なので、寧ろ此の場合、自分で自分を邪魔物にして、弟の家庭から離れたらば好からうと覺悟致し、それを弟に申し聞けました。に、あんな我儘者の云ふ通りにしなくても可い。姉様がそんな事をすればするだけ附上るに違ひないから。」と弟は口でこそ私の申出を拒絶致しましたが、心で然う思つて居ないとは疑々々々解つて居るのです。それで私は強く云張つて

▲遂々弟と分離 致し、さる知合の家に寄寓致しましたが、其後弟の嫁が歸つて参り、割合に家庭も平和だと聞きますに連れ、先づ弟の爲めに一心に攻めました。併し人間の心は、不思議な事から合つたり離れたりするもので御在ます。私は、從來自分が愛してきた弟が、その妻の爲めに私を疎んだ、疎なくも、私が出て行つたので嫁が歸つた事を喜んだ。果敢、忍よりも嫁の方を重く見た、こ然う感じないで居られません。すると元來が嬌氣と云ひませうか、曲け者と云ひませうか、兎角當り前で居たくない私の心が、急に弟に對して、謀反の行を引き初めました。姉

姉ども思はねやうな弟の家へ誰行く者か、死んでも行きやしないさ、云ふ心持から、次第に私共二人の心が離れぬとなり、面白くない月日を送つて居ましたが、其の中、弟は實家先の男爵から金を出して貰つて、洋行するといふ騒ぎ、繼て私に一臂の力を附してやるさうな約束などは、夙の計に忘れて了つて、夫婦連れで

▲歐山米小に新婚旅行 を終了するため、母を妹の處へ預けて置いて出發してしまひました。私はこれで既う、當分の目的も失くなり、事業も何も出来なくなりました。併し事業は兎もあれ、弟

仕打が餘人を見下げて居るやありませんか。成る程、私はまだ浪人者で、何一つ弟を慕はずやうな仕事が出来ません、併し母一人位を養ふだけの収入はあるつもりだのに、それを態々遠方の田舎の妹の嫁家へ預けて行くといふ、其の一つの態度だけ、私はもう憤として了ひました。何とでもするが好い、私とてまだ前途がある。今に後悔をするやうな事があるよ、さ、内々では弟を思ひましたが、それから云ふもの、私は凡ゆる機嫌を利用して、自分の地位を作る爲に善悪足掻を初めたので御在ました。(つづく)



老嬢の告白

私の放浪時代

のことがあつた。それは、爾後の二年間は、
かにそれで御任しました。或時は女
学校の教師となり、或時は化粧品商の女
主人ともなる。さては家庭教師、婦人傳
道師、雑誌記者と、種々の職業を求めて
幾んど移りもたない人生の波路を渡り、
致しましたが、表は強さうに見せかけま
しても、實は弱いのが女性の性質で御任ま
すもの、人生を下に見て、高笑ひして居
ります。時こそ、心では大聲を揚

げて泣叫び、腸を搔掻
る様な、大悲痛を味つて居たの
でした。且は女の淺果敢な心意氣から、
女でも獨りで立つて行けるぞと云ふ所
が、世間に見せつけてやり度くて堪まら
ず、其の爲めには限りもない苦みを押し
藏して、心にもない生活を営まなければ
なりません。かうした生活は、物質上か
ら見ても、精神上から云つても、兎でも
私の背負ひ切れる荷物では御任ません
でした。この荷物の重味が次第に私の心
臓を弱らせ、何時か知らぬ間に白癡の數
を殖やし、

▲皮膚の艶を荒 しました。此の
年頃には、まだ艶々として女の盛の色を
取留てゐる人も尠くはないのに、私は生
れついでに醜い上へ、更に悲の風

苦みの雨、幾多の嵐に曝

れたので御任すれば、心がらどは云な
がらもう見る影もないお婆さんに成て
たので御任しました。あゝ女の四十前後
私はこの時代の女の方を見るに、同情
に堪へません、何故同情するに彼等のの
ですか。男の方にはお解りにな

りますまいが、女には一生の大

厄が御任す。女が四十の聲が懸る
と、否でも更年期といふ大厄を迎へねば
なりませんので、つまり女としての生
命に最後の止めを刺される時代で御任ま
す。恰度小女が初めて處女になる時のや
うに、女が女で無くなる此時

代の驚き、嘆き、それはもう何と

も聲へ様のない心持で御任す。それも
初め一處女になつた時の驚きは、希望の
ある驚きなれど、更年期の驚きは、實際
▲絶望の驚愕 なので御任す。若
穹から星が滑り落ちて、無相の大海に沈
んで了ひまするよりは、もつと一神秘
な、奥底の空洞とした、手應のない驚き
で御任す。夫を持つて居りましてさへ
此の期に會つた女はみな、何となく沈鬱
になり、神秘的になつて、自分が落

ちて行く底の底の、底も知れ
ぬ奥底の宙字に、自分の
未來の墓が吊されて有る、そ

れが明瞭と眼に映るやうに思はれて、何
ともない事に泣き笑ひの狂態を見せるも
のです。況してそれが獨身の、寡婦とか
私のやうな老嬢とか、兎まれ頼りの影
い身にとつては、一層に激しく感ぜられま
して、まるで狂気のやうになるもので御
任す。而して私は、三十九の秋になつ
て、此の恐ろしい更年期を見ねばならぬ
運命で御任しました。(つどく)



老嬢の告白 (續)

▲更年期前後の私は矢張り先に申し上げたやうな狂態を演じないでは居られませんでした。深山の岩

岩との間に咲いた花のやうなもので、人にも知られず、果をも結ばずして

随せて凋びて行く、女として、世の中にこれ程悲しいとは有りません。種の斷絶

です。自我の滅亡です。第二の吾、第三の吾を見ずして死んでゆかねばなりません。私はそれが堪へ切れぬ苦痛でした。

蟄とか蟬とか、あゝした短かい生命の邊でさへ、尚ほ繁殖の務めを果たして死ねては御座ませんか。慙うしたを申上げ

る、何か私が、男でも欲しいと思つてゐるやうで、可笑しく御聞きになるかも知れませんが、然うではありません。真

面目にお考へ下さい。さすれば繁殖は動物の本然で、中にも女性の生きて居る本當の所以は、この一大義務を果たす爲めなのでせうに、私は遂にこれを果さず出来ないと云ふのです。これを悲まないと何ぞ思ひませう。あゝ

▲私は豈より不幸だ、つくづく淋しい。したのも、全く障りの

ない告白で御座います。云ふか云はぬかでこそあれ、世間の老嬢が一番に恐しがるのは、この更年期時代なので、實にこの時代ほど、老嬢を憐れに見せる時代はありません。そして又此の時ほど老嬢の心理を複雑にする時は御座いません。静くとも私は然うで御座いました。嗚呼もう

最後だ、こいふ感じ「残念」「絶望」の心に交つて、反抗的に「ナニ構はない。女から男に生れ代つたつもりでウシと事業をして見せる」といふ野心、

「四十を超えてこそ世間の信用がつく」といふ自尊心。それよりも「どうかし

て此時代に抗らつて」といふ、弱い心が先に立ちますもの、畢竟死んで行く

肉の健康が、此上もなく人生の樂みに執着して、煩悶し、

絶叫する心とも申しませうか、何を犠牲にしても可いから、どうか女と生れた甲斐には、女としての一日を送つて見たいといふ。

▲切なく悲しき願ひに身を焦らすので御座いました。此の刹那には、常人の眼中には宗教上の信仰もなく、世間の道徳も倫理も有りません。ただ自分の最後

に、僅かの満足でも可いから受けて見た

いといふ、極めて動物的な、餓ゑ氣のな

い、影として居られぬやうな慾望に驅られる。一方で御座います。人が神にな

る間に通過しなければならぬ動物時代。とても申しませうか、神経

は金々鋭敏になり、情熱は愈々旺になり其時まで極されてゐた血潮が一度に急に逆行して、何でも可い、誰でも好い、自

分に近く觸れるほどの者を捉へねば止まぬ、凄まじくも不思議な、不可抗力に取

附まれて、全然逆上つて了ふもの。私も實に、この傷むべき經驗に會ひまして、これを制止する爲めにどれほどの苦悶をした事でせう?



●老嬢の告白(續)

▲感情の権化までも申しませうか
更年期時代の女が兎角其の間に失敗勝ちであるとは既にお話致しました通りですが、私も實は、辛く失敗しなかつた丈けの事でした。其の頃、私は種々の職業に轉々して居りましたが、其の境遇の

變遷するに連れて、周圍から色んな誘惑を受けて居りました。

此の誘惑と云ふものは、如何なる女、男にも必らず附纏ふもので御座りますが、それが又、若い男女に限つた事ではなく、私のやうに随分老年の女たさへ遠慮なく襲ひ掛つて参ります。殊に恐るべきは無類なやうな餌をして、其餌の信者だとか何だとか、聞いた丈けでは良心も強く、意志も強く、罪も悪も知るまいと思はれるやうな、而してまだ極年も若い、立派さうな青年紳士が、好んで四十年の女に近附き度がり。

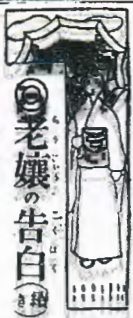
▲中年女を誘惑しやうとする、此の風俗は、近頃になつて益々太くなつたやうで御座りますのね、今の私の議論から云へば、男の癖に女の機嫌

を取りたがるやうな意氣地なし人間、萍だと思ひます。それ

も青年の男女が、利害、離れた純粹の愛の

始めに自己を犠牲にするとか、其の爲めに一方が對手の前に膝を折るとか云ふのなら兎も角もですが、青年が老嬢の前に膝を曲めて、自分から好んで其の玩弄物にならうとする量見は、如何にも腑甲斐ない、腐れはてた量見だと存じます。加之に、那麼意氣地のない青年に限つて、屹度利害の念だけが鋭敏で、機會さへあれば女を餌めやうとして居るのです、皆々が皆然うでもありますまいけれども、若しかして利害の念が無いと云ふなら、それは大した偽善者です。那方にしても精神を持つた男の爲るまでない。だから私は大嫌ひですが、可笑しいとは、奥きに馴れて臭きを知る、私が此の三四年前は、現に、

▲そんな男を憐れで、彼等を近附け、冗談を云ひ合ひ、随分だらしの無い事を仕合つて満足して居りましたのでした。けれ共其の間に私の、世智を經た良心は根から底から然うした事を喜んで居たのでは御座りません。それには確かに前中し上げた更年期病の影響も有つたのでせうが、一つには確かに私の考が、自暴自棄に近寄つてゐた爲めに相違御座りません。但、如何に自暴自棄とは云へ、凡を投出して丁ふ迄の勇氣がなかつた丈けで、辛く墮落の難を免がれたのでした。それで「あの家へは若い男が出入りする」と噂される頃には、私は屹度居を轉じて、又新しい放埒に耽るのでした。然うして一年ばかり、うかつかと暮して居ます間に、愈々覺醒しなければならぬ時代が近附いて來たので御座りました。(つづく)



老嬢の告白

▲最後の危機 辛苦の思ひで切り抜け、致しました私は、勿論自分の力で然うしたと云はうよりは、周囲の思惑さか、世間の噂さかを憚かつて、うさせられたに違ひありません。けれども先づ形の上から云ひますれば、私は無事に更年期の誘惑を拒ねつけて通る事が出来た。来しました。する間に、自分で自分の

生涯を振顧つて、眞面目

になつて、覺醒すべき時が参りました。それも色々の原因が集まつて、私の心その面ににさせたのですが、何にも優

つて私の心を打つたものは、母の死で御座りました。母は死にました。母の死を悲しむのは誰しも同じ事で、私はそれを殊更に申上げるのではありません。たゞ、不幸である運命であつたとは云へ、其の時まで人生の華やかな楽しい處ばかりが眼につき、老嬢の嘆をもらすとは申せ、何

獨身者の無責任

を味つて居りました。私が、初めて人が衰へて、人が死んでゆく状態を見ました刹那の感じ、つまり私の前に迫つて来た死といふ一大事實が、どんなに私の心を愕かせましたかは、殆ど形容の言葉も御座ませんのでした。實際、死といふ一事は、人間の心を引締めさせるものは御座りますまい。考へて見れば、何の彼のだは申しながら、私は四十になるまで、死といふものが如何に怖ろしいものか、非常なものであるかを知らないで、うかうと暮して居たのでした。佛者の言ではありませんが、

朝の紅顔夕の白骨と云ふ

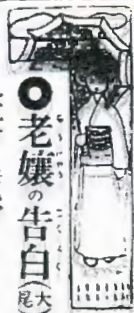
事が、冗談でなく、我が胸に響くのは、母を失ふとか何とか、何か然うした事實に觸れて見れば解るものでないで存じます。秋よりも物淋しいと云はれる春の暮れ、私は今死んで行かうと云ふ母の枕頭に坐つて、死の力を思ひ周らさないで居られませんでした。人は生れると兵に死を約束されて居る……死を志して生れた……生れる前に死んで居る位の運命です。これを思へば、

▲空虚な四十年

の生涯は、實に悲むべき生涯であつた。私は自分が生れた事を知つて、死ぬ事を知らなかつた。それ許りか、死んで更に生れ回る事を知らなかつた……然う考へますと、生れて「お前是不変色な子だ」と云はれた時から、戀愛をした事、近くは放浪をした事、其の間々の浮草のやうな生活を思ひ浮べ、それらの追憶が虹のやうに心に映つて消え去つた後は「嗚呼何

も無い、眞闇だ！」と心に叫ばね

ばならぬ頼りなき、淋しさを感じました。「私は生れ代らねばならん」これ迄のやうな、自分を解め得ない生活では、うき草の命で、足を確かき地上に下す時もないであらう。私は思ひ／＼して、春の一夜を母の枕邊に泣き明かした事でしたが遂に母は逝去致しました。母の死は私に新しい命を與へて呉れました。私は死ねる刹那までも娘の事を思ひ、娘に一種のインスピレーションを與へてくれた母に、心からの感謝を捧げても、尚、掛け足りないだらうと存じます。(つづく)



○老嬢の告白(尾大)

▲四十年間の試練

去りました。有象無象、煩惱の數多かりし昨日の夢は消えて、今は心無の光明かた安心の家に居るとの出来た私、種々の惑、不安、羞恥、偽善、放埒、それらは皆振り棄てて了つて、漸く自分

一人の自由な生活

めるやうになりました私、あゝ此の私はもう昔の私では有りません。それで實際の生活も、今では何の功名も野心もなく多少の貯蓄を有つて、一年の大部分を田舎に暮し、

虚榮も虚飾もない

自然と、農民とを相手に日

を消して居ります。弟は一昨年、歸朝致しまして、今では某台社の重役を勤めて居りますが、一年に三度、私の方から上京して出會ふ位のもの、弟嫁も、此頃

で、大分實際の世間が解つて來たらしう御座います。まあこれが

△私の大体の告白

なもので、随分酷いまで申上げたかも知れませんが、若し幾分でも世間の參考になるですれば私、これを發表した望は足るので御座います。けれ共、附加へて申上げて置きます。度いとは私が何だか馬鹿にお覺りをして丁つたらしく見えませうけれ共、矢張り私も人間だといふ事で御座います。成る程昔のやうな氣風な眞似は、仕度くもありませんけれ共、今も矢張り相當の偏屈者で、ヒステリーで、殊に男のやうな氣風であるとは、どうも然うでないとは云ひ假れませんです。たゞ幸に之れまで、色々の誘惑に會ひましたけれ共、女としての貞操を、肉体の上だけで取り止めて來た事を、せめてもの満足と思つて居ます位のこと、何も自分の過去を誇りがにお話したのでは御座いません。殊に

▲犠牲の一生

といふ事を考へる時には、くすぐつたいやうな、苦しいやうな、あの世間で泣き笑ひと申します、それに似た心持になつて、半日位考へ込んで居るとも度々で御座います。兎まれ世に剛はなかつた一生の思ひ出でに、且つ世間の老嬢を誤解する人々の心を和める爲めに今一つは老嬢生活を送つて居られる方々に代つてといふ心もあつて、つひ長々とお喋り致したので御座いました。胸の火の、もし身を焦がすもので御座いますれば、私などは夙くの昔に焼死んで居たで御座います。

『老嬢の告白』は六月十三日の紙上に初ま
つて、八月十一日を以て漸く完結を告げ
ました。前後約六十日、五十回を超ゆ
る長篇となりました。教育の運命を担
いた女性の一代を語るには、まだこれ
位では足りないかも知れません。けれ
共、大事小事、殆ど遺す處のないやうに
而も率直で、大膽で、云ふ處まで云はな
ければ措かないと云つた風があつたのは
思ふに此種の文字の中で、從來世に發表
された、最も内容のある讀物
であつたと感じます。それで、豫期以上
の感銘を讀者諸君に呈したことです。恐
らくこれは諸君が、この老嬢の精神に感
まされて、一種の道徳的同情をお拂ひ下
すつたからだと思ふ。由來、記者が此の
大告白を紙上に發表した所以は、一つに
は此のお氣の持主老嬢を天下に紹介して
老嬢といふ者を了解され、それに同情さ
れんことを望んだから、二つにはこれに依
つて、日本新舊の女子教育家
並に女學生諸君に幾分

の教訓的意味を呈したいから
でありました。然うして、是等の目的は
殆んど十二分に達せられた。殊に、讀者
諸君が此の告白を讀んで、所謂老嬢なる
者の生涯、思想、缺點等を知り、分けて
も此の女主人公に無上の同情をお拂ひ下
さつた事は、諸方から山集して來る問合
はせの手紙や、老嬢あての慰問狀、さて
は記者あての書面などに依つて察するに
出來ました。實際この告白が、斯様に廣
く人々の心を動した事は、當の老嬢は勿
論、記者の厚く感謝する所である。
併しながら、讀者からの反響を綜合して
考へて見るに、多くはたゞ「可哀相だ、
氣の毒だ、異つた女だ、面白い女だ、出
來るなら一度出會つて見度い」と云ふ様
な所であるらしい。だから、あの告白を

「反省し、洞察し、戦
慄し、研究する丈けの讀者
が太に少くない、所詮は面白い讀物で
も讀者氣になつて居られる人が多いやう
であつた。勿論、あれは讀物としても非
常に振つて居ました、面白かつた」とは
云へ、大に普通の讀物や小
説とは異ふので、異ふ處があればこ
そこの感銘なるべき家庭機構も世代的の
でありませう。然らば何處が異ふ？それは
云ふ迄もない、乃ちあの告白中に含まれ
て居る、種々の教訓、警告、諷刺、反
省などの分子であつて、それらの點が十
分に了解しられなければ、あれを讀んだ
甲斐はないと申すものである。記者は以
下に「老嬢の告白」を讀んで感じた、主
なる印象を申述べ度いと思ふ。(つゞく)

●「老嬢の告白」に

現はれたる教訓（承前）一記者

告白の女主人公をして其の一生を数奇の運命に委ねしめるに立至つた動機は決して一通りや二通りの單純なものではありませんまい、彼女自身に然うと意識して居ないかは疑問であるけれども、少くも血統の遺傳といふものが有つたに違ひない。それから彼女自身の性格とか境遇とか、幾多して見れば色々な原因が經となり緯となつて、彼女一生の悲劇を構成したものと想はれる。中にも見遁すことの出来る、出来の一大事實は、彼女を育てた家庭の空氣、その両親の心付でありませう。

「汝の様な不器量者はお嫁に貰ひ人がない」といふ言葉が、動もすると両親の口に繰返された、何の自覺もない子供心に取つては、容顏の美麗が女の一大事である。現存生みの両親から不器量呼りをされた彼女は、後日の永く詫びしき老嬢生活に其の當時から種蒔かれたと告白して居る。未だ幼なき彼女の精神

に利刃を置いた者は乃ちその父母である。かゝる父母に父母としての恩愛と權威とのないとは勿論であるが、而かも悲しむべし、世間には此の種の、兒女の容色に依つて、愛情を異にする父母が少くない、遂には兒女をして容色本位の、精神も節操もなき人間たらしめるに至つて、初めて後悔するのであるが、これは寧ろ厭すべきである。我等が「老嬢の告白」を読んで、第一に受けたる教訓は、父母が子に對する

片言隻語の責任を覺るべき事でありました。第二の教訓は學校の選擇に就て考へねばならぬ事である。彼女は宗教學校に送られたのであるが、其の在學中、種々の空氣に動かされて大分性格の變易を見たと言ふ。勿論誰にした所が、境遇の感化を受けないでは居られませんまい、それを彼れ是れと云ふのではない。併し宗教學校通有の、面白からざる感化が如何に彼女の生涯を暗くしたかと云ふ事は就ては父母に七分の責任があると思ふ。一步を進めて、彼女が戀愛に逢着した時の事を考へるに、其所にも、父母の類たねばならぬ責任が秘んで居るらしい。要するに彼女の左右に就ては、父母に何等の興味が無かつたとは明瞭であらう、所詮は娘が死なうが生きやうが、何うても

片言隻語の責任を覺るべき

事でありました。第二の教訓は學校の選擇に就て考へねばならぬ事である。彼女は宗教學校に送られたのであるが、其の在學中、種々の空氣に動かされて大分性格の變易を見たと言ふ。勿論誰にした所が、境遇の感化を受けないでは居られませんまい、それを彼れ是れと云ふのではない。併し宗教學校通有の、面白からざる感化が如何に彼女の生涯を暗くしたかと云ふ事は就ては父母に七分の責任があると思ふ。一步を進めて、彼女が戀愛に逢着した時の事を考へるに、其所にも、父母の類たねばならぬ責任が秘んで居るらしい。要するに彼女の左右に就ては、父母に何等の興味が無かつたとは明瞭であらう、所詮は娘が死なうが生きやうが、何うても

なる様になれといふ、放任無干渉の極の突放主義が、彼女を誤らせるに十二分の原因を作つて居る。極言すれば、彼女が前半生の暗黒は、彼女の父母これを作り、その結果として、彼女後半生の悲劇を伴ふたものなる。何れにしても父母の罪は彼女の罪を越えて居る。是等は實に父母の態度として、太だしく詰責せらるべきもの、世間の父母に無上の教訓を與へるものと云ふ好しからう。さらば彼女に何の罪もないかと云ふに然うでない。我等は一方に彼女の父母を引例して世間の父母を責めると共に、彼女の誤ちを數へて江湖の老嬢たり、又は老嬢たらんとする人々の誤を正し度いと思ふ。それには彼女自身の後半生が最上の教訓を與へる材料となつて居る（つづく）

女が前半生の暗黒は、彼女の父母これを作り、その結果として、彼女後半生の悲劇を伴ふたものなる。何れにしても父母の罪は彼女の罪を越えて居る。是等は實に父母の態度として、太だしく詰責せらるべきもの、世間の父母に無上の教訓を與へるものと云ふ好しからう。さらば彼女に何の罪もないかと云ふに然うでない。我等は一方に彼女の父母を引例して世間の父母を責めると共に、彼女の誤ちを數へて江湖の老嬢たり、又は老嬢たらんとする人々の誤を正し度いと思ふ。それには彼女自身の後半生が最上の教訓を與へる材料となつて居る（つづく）

●「老嬢の告白」に

現はれたる教訓(承前)一記者

女主人公たる老嬢は、自から其一生を評して、**現代の生活**と云つて居る。成程、新舊同時代の時代的犧牲者たるには相違ない。けれども、彼女が告白を述べて現はれた彼女の性格は、寧ろ自分から進んで悲劇の種を蒔いて居るのではなからうか。同性の戀を味へると云ひ、青年を溺愛すると云ひ、放浪なる生活に耽ると云ひ、又會々生つて来た結婚談を意地になつて拒絶すると云ひ、或は十年久戀の教訓を棄てた事、更に弟嫁と衝突して放浪生活に入つた事數々來れば、人体に於て彼女

自身**の性格から生れた事**

實と見ればならぬ。但し前にも云つた通り、彼女の性格を然うした素因にまで追ひたのは別に責任者がありませう。

に我等は、彼女が後半生の告白に依つて、大なる性格の悲劇を見た。併し其根本に秘れた問題は別にある。曰く「女性の獨立問題」に於てある。其意味はあの皮肉屈のジョンソンが云つた「女の獨立は猶ほ**狎**後足**立**上

つた様なものだ」と云ふ一語に盡きて居る。賢明なる老嬢諸君は、よく此の意味をお解きになる事が出来ると思ふ。

従つて我等は、彼女が「女性」を何の邊まで了解して居たかを疑はねばなりません。告白を讀むと、彼女は中々奥深さうな眼を以て、人生を見透したやうな事を述べて居る。そして「矢張り私も女である」と云つて居る。けれども、若し「私も女」と云ふ事が**實際明瞭に解**

つて居た者とすれば、彼女**は恐らく中年を待たずして結婚したに違ひない。**我等の要する所、教へられる所は「女が女を知らぬ事ではあるまいか。自分を知らずして知つたか振をする氣風が、現代の女性を悲慘ならしめる事ではありますまいか。然うして斯の如きは、自分が女でありながら、實は女に裏切られて居ると云ひ得られる。

之れを要するに、告白を爲れた**老嬢の前半生は、父母其他の他人から「女」を誤解され、壓迫された爲め、後半生は自分て然うした爲めと云ふことになる。**畢竟自覺といふ事がなかつた爲である。或人は「女は永久に女を知る時代がない、若しあればそれは女が男になつた時である」と云つた。けれども、私共は左の如き女性を輕蔑し度くない。況や當代新自覺の兒たる女性諸君に對しては、

反つて無限の尊敬を捧げ度いのである。此意味に於て、記者は諸君に切實なる反省と、洞察とをして頂きたいと思ふ。かの新時代の教育を謳歌しむ女教師女學生諸君、さては天下の父母たる諸君「老嬢の告白」は決して人事で有りませんか、若し諸君にして**一步を錯**

ば更に複雑なる**悲劇**を見給ふに至らぬとも限りませんまいと云ふ事大けを申上げて他は悉く諸君の賢明なる御判斷に一任致すものである(完)

〔B-1〕 某文学博士談「意味深き暗示」「老嬢の告白」を読みて」『中央新聞』明治42年7月7日

（明治42年7月7日）

聞 新 央 中 （刊休無中平） （日曜水） 日七月七年二十四治明 （六）



意味深き暗示

「老嬢の告白」を読みて

某文学博士談

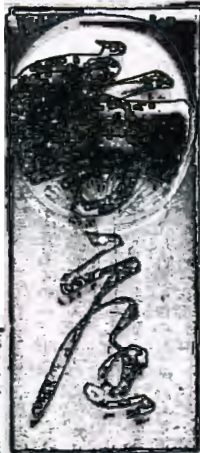
近時の女性問題に關し日頃多少の思慮を費しつゝある余は貴紙上「老嬢の告白」を読みて種々の意味深き教訓を得たるを覺ゆ。先其態度の大膽なるに驚くと同時に退去を語つて穿細、事を叙して露骨、一生の數奇を語ると云はんよりは、寧ろ面を打して女子教育界の弊風を衝くと甚だ沈痛、殊に近頃一轉して女性の秘密を問ひ、不自然なる同性の戀を暗示するが如き、これ修飾を旨とする者の言ひ能はざる處なるべし。

新舊時代の推移、これに伴ふ精神、道徳の弛廢、理智、感情の變遷等は老嬢の告白に於て掌中の物を指すが如く見を得。女主人公を周る大氣と、今の女學生を裹む大氣との差の如何に甚しきか、彼女が自我を殺して周囲に生きむとし、而も周囲の犠牲となりし、此女は周囲を排して自我に活きむとし、反つて自殺に了らんとする傾向あるが如き最も注目すべき點なり。

歸むべきは彼女が若き犠牲の時代に毗して、老ひたる胸に新時代の燭を焚けるに似たることなり、我等は彼女が總ての過去の生活を否認する處に、その胸の怪くも極き亂れたる聲を聴く。されどこれは尙ほ忍ぶべし、忍ぶべからざるは新時代の女性にして尙ほ此の老嬢の變に従はんとする者多きと之れ也。諸君は彼女の悲惨なる心内の苦悶と血汐滴る境遇とに堪へ忍ぶの勇氣と自覺ありて然るや否やこれ我等の最も懸念する所、其身其心は依然舊風に囚へられ、舊時代の大氣中に哺育されながら單に其聲のみを壯にするは危険是れより大なるはなし。かゝる意味於て老嬢の告白は近來有益の文字として子女を有する親達の輕視すべからざるものなり。

△「老嬢の告白」を愛読す

「読書は主に怎いよものを爲さいます。」
「居まつたものは何も讀みません。雜誌位なものです。小説ですか、好きですけど、此頃は餘り讀みませんから、作の批評などは出来ません。私の好きなのは却つて歴史とか家庭物とかでせう。學校(三輪用)に居ました頃は色々な物を讀みました。出てからはつひ何も後で忘れて了ひました。音樂？え、聞くのは大好きですが、自分では出来ませんのよ。」と凡てが然うした進達な女子であるが、實は晝君に似て、何事にも堪能な女生れつぎと聞いて居た。話がよき新聞の事になつた。合座は變附して、私は扱ひ事中央新聞を讀んで居ます。殊に家庭物は色々有益な記事が澤山にあつて結構です。老



煙の告白」は毎日持ち兼ねて拜見して居ます。「あんな女主人公が、あまうにやぶさひですか。」と訊ねると、令煙は鳥渡小首を續けて、白い齒を見せて、「何だか有うさうで御座いますのね。」

明日の献立

歌。あまし山かけ、
 唐辛無煮。
 生胡付焼、大根卸し
 らつさやう早漬
 夕。骨抜き鯛玉子とち。
 白爪。